



子どもたちに 聞かせたい創作童話 第43集

鹿児島市
鹿児島市教育委員会 編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第43集

鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

刊行のことば

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人がごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十三回目を迎えた今回は、県内はもとより国内四十の都道府県から、第一部、第二部合わせて二百七十三点もの応募がありました。また、年齢で見ますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話 第43集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた八作品をご紹介します。身近な日常を描いたものからファンタジックな作品まで、どれも子どもたちの夢をはぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた三名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和四年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人がごしま教育文化振興財団

目次

刊行のことは		1
「第43回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品		4
第一部 特選 「大ちゃんのあいいうえおかきくけこ」		5
第一部 入選 「さくらちゃんのほくろ」		16
第一部 入選 「にげだしたおかね」		30
第一部 入選 「あひるのアッヒルダー」		45
第二部 特選 「ぼくらのニワトリ奮闘記」		57
		57
		45
		30
		45
		57

第二部 入選	「白い鳥」	たぬきたぬこ	75
第二部 入選	「庭いっぱいの白い水仙」	樋口達也	97
第二部 入選	「ジャミとコンフィチュール」	村上ときみ	117
総評			133
入賞作品の選評			135
「第43回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項			142
応募状況			143

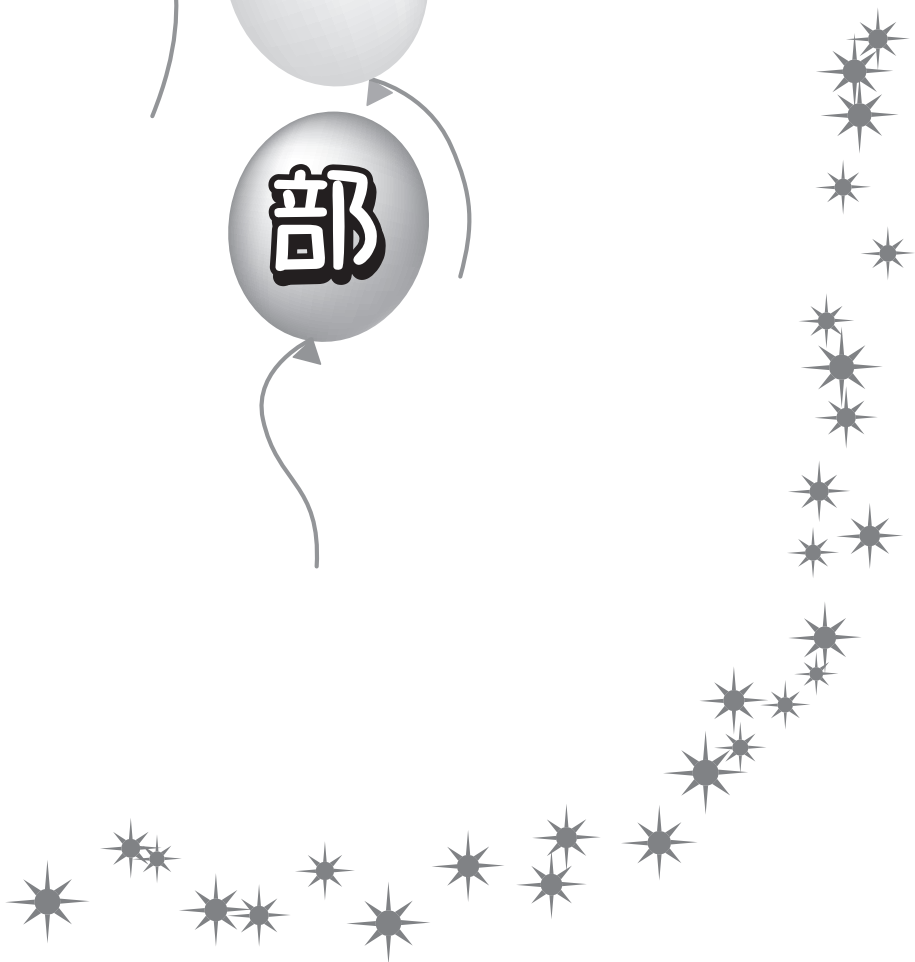
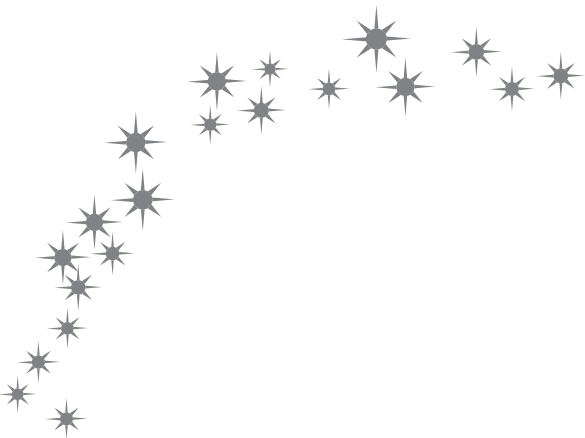
「第43回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	大ちゃんのあいいうえおかきくけこ	村上ときみ	神奈川県
入選	さくらちゃんのほくろ	春	大阪府
入選	にげだしたおかね	横井誠	愛知県
入選	あひるのアッヒルダー	橋本佳代子	兵庫県
佳作	ロケット大根	さとうしほ	北海道
佳作	おばあさんのマフラーの色が赤から白へかわったわけ	こばやし こうじ	山口県

〈第二部〉小学校中・高学年を対象にした作品

特選	ぼくらのニワトリ奮闘記	みやぞのせいこ	鹿児島県
入選	白い鳥	たぬきたぬこ	神奈川県
入選	庭いっぱいの白い水仙	樋口達也	福岡県
入選	ジャミとコンフィチュール	村上ときみ	神奈川県
佳作	魔女と黒猫	山口智史	大阪府
佳作	初雪布	舘 寿美子	青森県



第

一

部

大ちゃんだいのあいいうえお かきくけこ

村上 ときみ

「宿題しゅくだいおーわり！」

大ちゃんだいは、ぱさつとノートをとじながらこう言いました。

「さあ、ゲームして遊あそぼう」

いすから飛とびおると、ゲーム機きの方ほうへ近ちかづいて行きます。

そうして、大ちゃんだいがゲームのスイッチを入いれようとした時ときです。

「だめだめ。まだ終おわってないわ」

どこからか、キンキンとひびく声こえが聞きこえてきました。

「えっ？」

大ちゃんだいは、スイッチにのぼした手てをびっくりとめました。

「そうだよ。終おわってなんかいないよ」

今度は、おっとりとした声こえがしました。

「だ、だれなの？」

大ちゃんだいちゃんは、きよろきよろまわりを見みながらたずねます。

けれど、部屋へやの中には他ほかにだれもいません。

「へんなの」

大ちゃんだいちゃんが、目めをぱちくりさせていると、

「ここよ、ここ」

キンキンした声こえが、また聞きこえてきました。

「今いまどじたノートの中なかだよ」

おっとりとした声こえも聞きこえてきます。

「さあ、もう一度いちどノートを開ひらいてよ」

なんだかよくわからなかったけれど、大ちゃんだいちゃんは言いわれるままに、ノートをそつと開ひらいてみました。

ああああああああああ

い い い い い い
う う う う う う う

最初のページには、「あ」と「い」と「う」がたくさんならんでいます。

大ちゃんは、今年小学生になったばかりで、今は学校でひらがなを勉強しているのです。

「次のページだよ」

おっとりとした声に言われて、大ちゃんはページをめくりました。

するとそこには、「え」と「お」がたくさんならんでいます。

「ほら、よく見てよ」

おっとりとした声がありました。

「ぼくの点、左についてるだろ。先生が赤いペンでなおしてるじゃないか」

大ちゃんは、ノートをじっと見つめます。

「わっ」

たしかに、大ちゃんが書いた「お」の字の点は、右がわでなく、左がわについていました。



そして、その左^{ひだり}がわの点^{てん}が、ピツと光^{ひか}ったような氣^きがして、おどろいてしまいました。どうやら、おっとりとした声^{こえ}の持ち主^{ぬし}は、ひらがなの『お』のようです。

「洋子先生^{ようこそんせい}は、ノートをみんなにかえした後^{あと}で、こう言^いったよね。『今日^{きょう}の宿題^{しゅくだい}は「か」
「き」「く」です。十回^{じゅっかい}ずつ書いてきて下さいね。それと、今日^{きょう}かえした中^{なか}でまちがって
いた字^じがあったなら、もう一度^{いちど}正^{ただ}しく十回^{じゅっかい}ずつ書いてきて下さい』って」

おっとりとした声^{こえ}は、ちよっとおこっていました。

「だけど、大ちゃん^{だいちゃん}はまちがったまま、正^{ただ}しく書^かきなおしてくれてないよ。なんだかバ
ランスが悪^{わる}くって、ぼくは調子^{ちょうし}が出^でないままだよ」

そう言^いわれてみると、おっとりとした声^{こえ}には、元氣^{げんき}がないようです。

「ごめんね。書^かきなおすのわすれてたよ」

大ちゃん^{だいちゃん}は、すまなそうにあやまります。

「それと、次^{つぎ}のペー^じジにいるこの私^{わたし}」

キンとした声^{こえ}が、また聞^きこえてきました。

大ちゃん^{だいちゃん}は、となりのペー^じジに目^めをうつします。

「これじゃ向^むきが反^{はん}対^{たい}よ。きちんときれいに『き』を^か書^かきなおしていただけるかしら」

大ちゃんは教科書をぱらぱらとめくり、ノートの字と見くらべた後で、

「ほんとだ。反対になってる」

ぽつりと言うと、右手で自分の頭をこつんとたたきました。

「ごめんね。これもすぐに書きなおすからね」

大ちゃんは、大あわてでごしごしとまちがっている字を消し始めました。

そして、きちんときれいに『き』を書きなおしたのです。

「これでいい？」

大ちゃんは、はずかしそうにノートの中の『き』にたずねました。

「ええ、これで大丈夫。これなら、フラフラせずに、きれいにおどろくことができる

わ」

おちついた声になったひらがなの『き』が言いました。

「おどろくの？」

大ちゃんが、首をかしげます。

「昨日洋子先生が宿題のノートをあずかっただろ。先生はよく達を確認した後で、机の上にノートをおいて帰ったんだよ」

「ふん、ふん」

大ちゃんだいちゃんは、大きおおくうなおずおきます。

「そして、先生の机せんせい つくえ うえの上でひとばん、ぼく達たちは音楽おんがくの教科書きょうかしょといっしょにすごしたんだ。音楽おんがくの教科書きょうかしょはじめて会あった記念きねんにつて、たくさんの歌うたを、ぼく達たちに聞きかせてくれたんだよ。うれしかったな」

ひらがなの『お』は、うっとりとした声こえで言いいました。

「とても楽たのしい歌うただったんで、みんなで一いっしょ緒しよにノートの中なかで歌うたっていたんだよ」

「そのうちに音楽おんがくの教科書きょうかしょから音符おんぶが飛とび出だして、ノートのまわりで歌うたいながら、おどりにさそってくれたんですつて」

『き』は、うらやましそうに言いいました。

「ぼく達たちはすぐうれしくなつて、グンと背せのびしてみたんだ。そうしたら、するりとノートの中なかからぬけ出だすことができたよ。それから音符おんぶといっしょに、机つくえの上うえでおどったんだ」

ここで、『お』は、ため息いきを一ひとつつきました。

「けれど、ぼくだけぎくしゃくして、うまくおどれなかったんだ」

「どうして？」

大ちゃんだいちゃんがたずねます。

「だって、点てんが反対はんたいがわについているんだもん。バランスが悪わるくて、つまずいてばかりだったよ」

「けんちゃんの『お』も、えみちゃんの『お』も、こうじ君くんの『お』もうまくおどれたのに、大ちゃんだいちゃんの『お』であるぼくだけがうまくおどれなかったって、とてもさびしそうに言いってたわ」

『き』も、ため息いきを一つひとつきました。

「この話はなしを聞きいたので、私わたしもさっきはついさけんでしまったの。」

『だめだめ、まだ終おわってないわ』って。だって、うまくおどれなかったら、私わたしも悲かなしいもの」

「そうだったのか。君きみだけがうまくおどれなかったんだ」

大ちゃんだいちゃんも、なんだかさびしくなってきました。

「早くはやゲームがしたいからって、よく見みないで終おわらせちゃったんだよ。ごめんね。ぼく、今いまからちゃんと書かくね」

大ちゃんはすぐにまちがって書いた『お』の点を消しゴムで消しました。
そして、まちがえないようにうんと注意しながらゆっくりと、『お』の点を右がわに書いていきました。

「ねえ、これでいい？　これで、うまくおどれるかな？」

大ちゃんは、ノートに顔を近づけて言います。

「うん、かんぺき。これで、うまくおどれるはず。なんだか体がすっきり軽くなった気がするもん」

ひらがなの『お』は、うれしそうに言いました。

「そうだ」

大ちゃんが、とつぜんぱちんと手をたたきました。

「今日は、ぼくが歌ってあげるよ。音楽の時間に、ぼくも教科書の歌をならっているからね」

「わあ、聞かせてよ」

ひらがなの『お』が、はずんだ声で言います。

「ぜひ、聞きたいわ」



『き』もうれしそうです。

「でも、ならったばかりでまだうまく歌えないから、おどれないと思うよ。聞くだけにしてね」

大ちゃんはこう言ってから、すうっと息をすいこむと元気に歌を歌い始めました。

それから二日後のことです。

「大ちゃんの字は、元気があっていいですね。今にもおどりだしそうです」
宿題のノートを一人一人に返してくれる時、洋子先生はこう言ってくれました。

「ふふふ」

大ちゃんが、うれしそうにノートをうけとります。

そして、席にもどった後で、

「昨日の夜は、ちゃんとおどれたんだね」

大ちゃんは、机の上においたノートに小さな声で話しかけてみました。

「うん。とっても楽しかったよ」

ノートの中から、ちっちゃな声が聞こえてきたような気がしました。

さくらちゃんのほくら

春

小学^{しょうがく}一年生^{いちねんせい}のさくらちゃんは、小学^{しょうがく}校^{こう}に入^{はい}ってから、ずっと、いつもかおや体^{からだ}のほくらを、いじめっこにからかわれていました。

「やーい、やーい。今日^{きょう}も、ほっぺたに、くろいごはんつぶつけたまま、学校^{がっこう}に來^きてるやつがいるぞ！」

「ちがうもん、ちがうもん！」

「手^てにも、つけてるぞ！ 手^てあらってないんだぜ、ばっちいなあ！」

「ちがうもん、ちがうもん！」

「かたにもついてるぞ？ へんなやつ！」

「ふええーん。ちがうもん、ちがうもん！」

さくらちゃんの手^てくびと、かたと、ほっぺたに、くろくて、まあるい、ほくらが^{ひと}一つ、



二つ。何のやくにも立たないのに、ポツンとそこにくっついていて、あらったってひっかいたって、きえてくれません。

「ママ。何で、ほくろって、ついてるの？」

「うーん。何でなんだろうね？ でも、きっとさくらにとって、大切なものだから、そこについて、生まれてきたのよ。」

「こんなの、ぜったい、大切じゃないもん。」

さくらちゃんは、なき出してしまいました。

つぎの日の朝。さくらちゃんは、おふとんから出たくありませんでした。学校に行けばまたからかわれて、わらわれてしまいます。ただただ、いやな気もちになることがわかっていたからです。

でも、行きたくないといえば、ママがこまったかおと、かなしそうなかおをするのも、さくらちゃんはちゃんとわかっていました。だからしぶしぶ、ランドセルをせおうと、とぼとぼ、おもい足どりで、さくらちゃんは学校へと出かけていきました。

そんな朝がつづいた、日よう日の朝のことでした。学校へ行かなくてもいい日なのに、朝から、こんな声がかきこえてきました。

『さくら、さくら。おきておきて。あそぼ、あそぼ。さくら、さくら。』

きいたことのない声に、さくらちゃんがおき上がると、へやの中に、大きな鳥かごに入った、一ぴきのくろい九官鳥がいました。

「え、なあに？ カラス？ あなた、だあれ？」

『さくら。あそぼ、あそぼ。ぼく、マイナ。ぼく、マイナ。』

「マイナ？」

『ぼく、マイナ。おきて、あそぼ。さくら。』

マイナはまっくろけっけ。まるでカラスみたいだけど、さくらちゃんをみて、いっしょうけんめい、はなしかけてきました。何だかいきなりしゃべる、小さなおとうができたみたいで、さくらちゃんは、うれしくなってきました。

「うん。マイナ、あそぼう！ でも、どうやって鳥とあそぶの？ かごから、出してもいいのかなあ？」

さくらちゃんは、おそろおそろ、かごとびらをあけてみました。すると、マイナはかごから、にゅっと、くびだけ出すと、あたりをきよろきよろ、見まわしました。

「マイナ、おいで？」

おそろおそろ、手をさし出してみると、マイナはひょいっと、さくらちゃんの手くびにのっかりました。

「わあ♪ えらいね、マイナ。ちゃんと、手くびにのれるの。えらい、えらい！」

『ぼく、マイナ。えらい、えらい？』

そおっと、さくらちゃんがあたまをなでてみても、マイナはにげません。こわがりもしません。それどころか、ちよっと、気もちよさそうに目をつむって、じっとなでられています。

『さくら、さくら。あそぼ、あそぼ。』

「うんうん。あそぼう。あれ？ カラスとちがって、くちばしがオレンジだね？ ほっぺたもきいろのせんがあるね？ マイナのかおって、きれいだね。」

『マイナ。きれ、きれ？』

「あはは、そうだね、きれい、きれい。」

さくらちゃんとマイナは、すっかりなかよしになっていました。

マイナは、さくらちゃんのあたまにのぼってみたり、かたで休んで毛づくろいをしてみたり、ひざの上ですわってみたり、じゅう気ままでした。しばらく、あそんでいると、マ

イナがさくらちゃんにいました。

『ごはん、ごはん。』

「ごはん？ 鳥^{とり}って何^{なに}をたべるの？」

よく見^みれば、鳥^{とり}かごの中^{なか}のごはん入^いれは、すっからかのからっぽでした。まわりにも、ごはんはありません。

どうしようかと、さくらちゃんがかんがえこんでいると、マイナはとつぜん、こういいました。

『ごはん、みつけ。ごはん、みつけ。』

「ええ？ ごはん、見^みつけたの？」

するとマイナは、さくらちゃんの手^てくびのほくろを、つんつん、つんつくつん。くちばしで、やさしくつつつきはじめました。

『ごはん、ごはん。みつけ。』

「それは、ほくろだよ！ マイナ、ちがう、ちがうってば。」

『ちが？ ちがう？ ごはん、ごはん。』

さくらちゃんがあわてて、手^てくびのほくろをかくすと、こんどは、かたにのぼって、か

たのほくろをつんつくつん、つんつんつん。

マイナはいいました。

『ごはん、ごはん。さくら、ごはん。』

「マイナ、ちがうってば。それは、ほくろなの。たべちゃだめ。さくらは、ごはんじゃないもん！」

『だめ？　だめ？』

いくらつつついても、もちろん、ほくろはとれません。たべられないとわかったのか、かたにのったまま、何だかシユンと、おちこんでしまったマイナは、さくらちゃんのほつぺたのほくろを、じいじいと見て、くびをかしげました。

「ああっ！　それも、ほくろだからね？　たべちゃ、だめ。ってか、たべられないよ？　ほくろなんか。ぜったい、おいしくなさそ・・・。」

『ほく・・・ろ？　ほくろ？　ほくろ。』

「そう、ほくろ。ごはんじゃないよ。マイナはそんなに、このほくろがおいしそうに見えるの？　おいしくないよ、ぜったい。」

さくらちゃんが、あきれてマイナにそういうと、マイナはいいました。

『おいし？　おいし。』

どうしても、ほくろをあきらめきれないらしく、ほったのほくろをつつくマイナに、さくらちゃんにくすっと、おもわずわらってしまいました。

「ほくろはたべられないけど、やさしくつつくならいいよ。マイナってヘンだね？」

『ほくろ、ごはん、マイナ、ヘン！』

マイナは、まるでさくらちゃんのことばがわかったかのようにまねると、ほったのほくろを、またつんつんつく、つくつんつん。何だか、^{なん}ほったにくちばしで、チュツチュとキスされたみたいでした。くすぐったいけど、マイナのくちばしがほくろにあたるたびに、さくらちゃんはうれしくなりました。太きらいなほくろだって、もし、そこにほくろがなかったら、マイナはほったにキスしてくれなかったかもしれないから。

それにしても、よほどマイナはおなかがいっているのかもしれない。かごの中のマイナのごはんは、からっぽだったから。

「ほんとうのごはん、ママにもらおう。ママなら、しってるよね？　マイナ。」

さくらちゃんは、マイナをかたにのせたままいそいで、キッチンにいるママのところへ行きました。

「どう？ マイナと、なかよしになれた？」

と、ママはマイナにびっくりすることなく、マイナのごはんを、ようお願いしてくれました。マイナのごはんを見てみると、まあくて、草のかたまりのような、ちよっぴりくろっぽいようなへんなつづ。なのに、においはくだもののようにあまい気もする。さくらちゃんめには、いかにもまずそうに見えるごはんなのに、マイナは、むぐむぐと、ごはんをおいしそうにたべていました。

「おいしそうに見えないけど、おいしい？ マイナ。」

『マイナ。おいしそ、おいしいそう。』

「おいしいそう？ おいしそうじゃなくて、おいしかったら、お・い・し・いっていの。」

さくらちゃんがわらっていうと、マイナはくびをかしげて、

『おいし？ おいし？』

むぐむぐと、口をうごかしながら、いいなおしました。

ごはんをたべおわると、マイナはぴいんと、かるやかにとんで、さくらちゃんの手くびにのりました。

『おいし、おいしそ。おいしそう。』

「さっき食べたのに、まだ、おなかすいてるの？」

『ほくろ、ほくろ？ さくら、ほくろ。』

「もう。ほくろはたべられないって！ マイナのくいしんぼ！」

さくらちゃんにそうわらっていわれたって、マイナはへいきなかおして、どこかぜふく風でした。

『くいしんぼ？ マイナ、くいしんぼ。』

さくらちゃんは、またわらいました。マイナはあきずに、たべられないさくらちゃんのほくろをチュッチュと、くちばしでつついていました。ほったに、かたに、手てくびに。マイナはちよろちよろ、いどうしながら、ほくろが目めに入るはいたびについ、ほくろをつんつくつん。

さくらちゃんはマイナとしゃべるのが、たのしくて、たのしくてたまりません。いっぱいはなしかけるほど、あたらしいことばをおぼえようとしてくれて。さくらちゃんとマイナは、はじめてあったその日ひから、すっかりなかよしのお友ともだちになったのでした。

つぎの日ひ。朝あさ、おきたさくらちゃんは、やっぱり、学校がっこうへ行くのがゆううつでした。ベッ

ドで、しかめっつらをしていると

『さくら、さくら。おきて、おきて。』

と、マイナの声こえがきこえてきました。さくらちゃんはマイナをみると、しぜんと、えがおになれました。

「マイナ。おはよ。」

『おは？ おはよー？』

いやな学校がっこうへ行くい前に、ちょっとだけ、マイナとあそぶことにしました。かごから出だしてあげると、ちゃんと手てくびにのってきてくれました。そして、

『さくら、ごはん、ごはん。』

といって、さくらちゃんのほくろをつつつき出だしました。はじめに手てくび。それから、かたと、ほったと。ぜんぶのほくろをつんつん、つつん。つつきおわると、ほくろをたべたわけでもないのに、何なんだかまんぞくそうなかおをして、かごの中なかの、ほんもののはんをたべはじめたのでした。

「マイナのくいしんぼ。」

さくらちゃんは、マイナにそういつてわらうと、ランドセルをせおいしました。

「やーい、やーい！ こいつ、またほったにくろいごはんつぶつけてきてるぞ！」

「手くびにも、かたにもゴミつけてるぞ！」

「いいもん！ このほくろは、マイナのごはんなんだから！ これで、いいんだもん！」

「は？ 何、いってんだ？ こいつ。」

からかわれても、どんないじわるをいわれたって、もう、さくらちゃんはなきません。いじめっこたちは、なかないつよきなさくらちゃんに、ひょうしぬけしてしまいました。

からかわれるから大きらいだったほくろ。でも、このほくろが、大すきなマイナ。ほくろをごはんとまちがえているけれど。さくらちゃんはそうかんがえると、マイナの大すきなほくろを、少しだけ、ほんの少しだけ、すきになれそうな気がしました。ママがいついたように、きっと大切だからほくろがついて生まれてきたんだと、少しだけおもえるようになりました。

きっと、くいしんぼうなマイナが、さくらちゃんのほくろにキスするために、ここにはほくろがついてたんだって。さくらちゃんは今、ほくろをからかういじめっこたちなんてちっとも、こわくありませんでした。

「マイナ。いまごろ、さくらのかえりをまわってくれてるのかな？ ほくろのかえりを



まっていたら・・・ちょっと、いやだなあ。」

マイナがうれしそうに、ほくろをつつくかおをおもいだして、さくらちゃんにくすつとわらいました。

にげだしたおかね

横井 誠

キリコさんは、たんじょうびのプレゼントに、ちょきんばこをもらいました。ブタさんのかたちをしていて、せなかにあいたきれこみから、おかねをいれるようになっています。

「きょうから、おこづかいもあげるわね」

「ありがとう、おかあさん」

キリコさんは、もらったばかりのひゃくえんだまを、ポケットにいれようと思いました。すると、おかあさんがいいました。

「おかねは、いまもらった、ちょきんばこにいれて、だいじにするのよ」

「なんで？」

「おかねはね、おあしともいって、あしがはえているの。だから、だいじにしないひとのもとからは、にげていっちゃうのよ」

キリコさんはおどろきました。ひやくえんだまを、ひっくりかえしてみましたけど、どこにもあしは、はえていません。

「あー、よかった」

「はやく、ちょきんばこにしまいなさい。ほんとうに、あしがはえるわよ」

「はい」

おかあさんにいわれて、キリコさんは、おかねをちょきんばこにいました。ブタさんのおなかのなかで、チャリーンと、いいおとがしました。おかあさんはいいました。

「おかねは、だいじにしていれば、おともだちをつれてきて、どんどんふえるのよ。でもはんたいに、むだづかいしてしまうと、すぐにあしがはえて、どこかにいつてしまうわ」
「わたし、だいじにするよ」

それから、キリコさんは、おこづかいをもらうたびに、チャリーン、チャリーンと、おかねをちょきんばこにいれていきました。おかあさんのおてつだいをする、おこづかいのほかにも、ブタさんのごはんよ、といって、おつりのごえんや、じゅうえんをもらえます。それもぜんぶ、ちょきんばこにいれました。おかねをたべると、ブタさんも、にこにこしているようにみえました。



でも、いちどいれてしまうと、なかのようすがみえません。ちょきんばこをひっくりかえして、そこをたしかめてみても、ブタさんのみじかいあししか、みえません。

そこでキリコさんは、ときどき、せなかのほそいきれこみから、おかねにむかって、こえをかけました。

「わたし、だいじにしてるからね。どこにもいっちゃだめだよ」

ブタさんを、りょうででもって、ふってみます。チャリチャリチャリと、おどがしました。まるで、なかのおかねたちが、だいじょうぶだよ、ぼくたち、どこにもいかないよ、といっているみたいでした。

そんなあるひのゆうがたです。キリコさんは、おかあさんといっしよに、きんじよのなつまつりにいきました。きんぎよすくいをやっているのをみると、どうしてもきんぎよがほしくなりました。

「ねえ、おかあさん。きんぎよすくいだって。やってみようよ」

「そうねえ。いっかいだけよ」

キリコさんは、わくわくして、やってみましたが、すぐにかみがやぶれてしまって、いっぴきもすくえませんでした。

「ねえ、おかあさん。もういっかい、やらせて。きんぎよ、ほしいよお」

「いけませんよ。おかねのむだづかいです」

おかあさんにたのみましたが、やらせてもらえませんでした。それでもキリコさんは、どうしてもきんぎよがほしくて、わんわんないてたのみました。でも、おかあさんは、うんとはいいません。しまいには、おこって、いえにかえってきてしまいました。

いえにかえったあとも、キリコさんのなみだはとまりません。じぶんのへやにこもって、ベッドにつぶして、しくしくとないていました。すると、ふと、ブタさんのかおが、めにはいりました。

「いいもん。じぶんのおかねでやるもん」

おかあさんから、むだづかいしないでと、いわれたことをおもいだしましたが、キリコさんは、どうしてもきんぎよがほしいのです。これはむだづかいではない、とおもいました。

そこで、ちよきんばこから、おかねをとりだそうとしました。ですが、どうやってだしたらいいのか、わかりません。おかねをいれるところはあっても、おかねをだすところはないようです。

「ううー、おかねだしてよおー」

ちょきんばこをさかさまにして、ちからいっぱいふっているうちに、てがすべってしまいました。

「あっ」

ガッシャーン。ちょきんばこは、ゆかにおちて、われてしまいました。

「うう、こわれちゃった」

キリコさんは、ゆかにペタンとすわりこみました。むねがちくんとしました。ブタさんのかおが、なっているようにみえました。

くだけたちょきんばこにまじって、おかねが、ゆかに、ちらばっていました。キリコさんは、それを、ひろおうとしました。

すると、そのとき、おかねがサツとうごいて、キリコさんのゆびを、すりぬけたのです。あつと、おどろいていると、おかねから、あしがはえてきて、すくくとたちあがったではありませんか。

「ぼくたち、おかねをだいにしないこは、きらいだな」

「わっ、おかねがしゃべった」

いま、しゃべったのは、ごえんだまです。

「ごえんだまには、くちがあるんだ。しゃべれるよーだ。きみみたいな、おかねをだいにしないこのもとは、さっぴていくからね」

「あ、まっぴてよお」

キリコさんは、おかねたちをつかまえようとしてました。

「あ、いたっ」

ひやくえんだまが、あしでけとばしました。

「おかねには、あしがあるんだ。だいにしてくれないと、けとばしちゃうぞ」

ひやくえんだまのかわりに、ごえんだまがしゃべりました。

おかねたちは、あいていたドアからでていきました。

「あ、まてーっ」

キリコさんも、へやをでて、おいかけていきました。だいどころにいくと、おかあさんが、たいへんなことになっていました。

なんと、おさいふからにげだした、おさつたちが、ちようちようのように、パタパタととんでいます。それをおかあさんが、ひっしになって、つかまえようとしていました。

「ちょっと、キリコ。そのおさつ、つかまえてちょうだい」

キリコさんも、てをのばして、つかまえようとしては、おさつは、ひらりひらりと、かわします。

「わっはっは。そんなんじゃ、つかまらないぞ。わがはいたちは、おかねをだいじにしないうちからは、にげていくのでござる」

いちまんえんさつがいいました。おさつにはかおがあるから、しゃべれるのです。

「おかあさん、どうしたの？」

「テレビにかわいい、いぬがでていたから、いぬをかいたくなって、おさいふのなかをたしかめていたのよ」

「もう、きんぎよはだめっていったのに」

「そんなことより、はやく、まどをしめて。にがしちゃだめよ」

キリコさんとおかあさんは、あいていたまどをしめました。でも、そのまえに、せんえんさつがいちまい、にげていってしまいました。

「げんかんにいきますわよ。みんな、げんかんからにげるのですわよ」

ごせんえんさつがみんなにいいました。おかねたちは、いっせいに、げんかんにむかい

ました。

そこに、そとでおさけをのんできた、おとうさんがかえってきました。

「うー、ただいま。キリコ、おみやげがあるぞ。さっきそこで、とんでいるせんえんさつをつかまえたんだ。キリコにあげるから、ちょきんばこにいれて、だいじにきなさい」

「おとうさん、ドアをしめてーっ」

でも、まにあいません。おかねたちは、あいたドアから、そとににげだしました。

「まってーっ」

キリコさんも、おかねをおいかけて、そとにでました。すると、そとはたいへんなことになっていました。まちのひとたちが、みんなで、おかねをつかまえようと、おおさわぎしていたのです。

「まちなさい、わたしのおかねーっ」

きんじょのおばさんが、むしとりあみで、とんでいるおさつをつかまえようとしていました。

「そらっ、そっちにいったぞ」

こどもたちが、きょうりよくして、こぜにをおいこんでいます。どうやら、まちじゅう

のおかねというおかねが、にげだしたみたいです。

「やったー、つかまえたぞ」

きんじよのおとこのこが、キリコさんのいえからにげていった、ひやくえんだまをつかまえて、とくいがりました。

「それ、わたしのよ。かえして」

「やだよーだ。ぼくがつかまえたんだから、ぼくのおかねだ」

キリコさんとおとこのこで、おかねをとりあいます。

「ちょっと、そのおかねはわたしのよ」

「わたしがさきにみつけたのよ」

「いいえ、おくさん。これはわたしのいえからにげたおかねです。わたしのものです」

おかあさんは、おさつをめぐって、きんじよのおくさんたちと、おおげんか。

おなじように、あっちでも、こっちでも、おかねのとりあいが始まりました。

おかねたちは、つかまらないように、ひっしににげます。

「いたい、いたい、けらないで」

「ぎゃっ、おかねがかんだ」

ごひやくえんだまや、じゅうえんだまは、あしでけとばします。あなのあいた、ごえんだまや、ごじゅうえんだまは、かみつきました。キリコさんのひやくえんだまも、するりとのがれて、にげていきました。

「こんなひとたちのもとには、いたくない。わがはいたちは、もっとおかねをだいじにしてくれるひとのもとに、いくのでござる。それ、みんな、あとにつづけーっ」

いちまんえんさつが、ごうれいをかけて、パタパタととんでいきます。ほかのおかねも、そのあとにつぎきました。

「あーん、わたしのおかね、まってよー」

キリコさんは、ブタさんのちよきんばこをわらなければよかったとおもいました。あんなことをしなければ、いまごろおかねはちよきんばこのなかで、じっとしていたはずです。

「もう、むだづかいしないよ。おかねをだいじにするよお」

「おやおや、キリコや。これはいったい、どうしたことかね」

ふと、じぶんをよぶこえがきこえます。ふりむくと、おばあちゃんがいました。

「あ、おばあちゃん。おかねがにげちゃって、たいへんなんだよ」

おばあちゃんは、あたりのようすをみまわすと、おちついてふところから、なにかをと



りでした。ちいさなカエルです。

「おばあちゃん、そのカエルどうするの」

「これはね、がまぐちだよ。おかねはだいにして、このなかにしまっておくんだよ」

おばあちゃんが、カエルをほうると、カエルはしたをべーっとのばして、ちかくをチョコチョコはしっていた、いちえんだまをつかまえて、たべてしまいました。

「わ、すごい」

カエルは、こぜにをどんどんつかまえては、たべていきます。こぜにをたべるたびに、ちよつとずつおおきくなっていききました。ごえん、じゅうえん、ごじゅうえん、ひゃくえんと、たべながらおおきくなって、ごひゃくえんだまをたべるころには、キリコさんよりもおおきくなりました。そしてとうとう、そらをとんでいる、おさつもつかまえるようになりました。おさつをたべると、さらにおおきくなります。おおきなおかねをたべればたべるほど、カエルはおおきくなりました。せんえん、ごせんえん、みんなたべて、あとはいちまんえんさつだけです。

「くそお、つかまってたまるか」

いちまんえんさつは、そらたかくにげていききましたが、そのころには、カエルはいえよ

りもおおきくなっていて、みんなつかまえて、たべてしまいました。

「やったね、おばあちゃん」

「だいじなものはね、ちゃんとかまぐちにしまっておくんだよ。だから、キリコもたべてもらおうかね」

カエルは、がばっとおおきなくちをあけて、キリコさんをのみこんでしまいました。

「あ、やだ、わたし、おかねじゃないよお」

めのまえがまっくらになって、なにもみえなくなりました。

「・・リコ、キリコ」

おかあさんが、よぶこえがして、キリコさんはめをさしました。

「あれれ、カエルは？」

「なに、ねぼけてるのよ。おまつりのばんごはん、おばあちゃんといっしょにたべるっていつてあったでしょ。はやくきなさい」

キリコさんは、じぶんのへやのベッドのうえにいました。ブタさんのちょきんばこは、ちゃんとそこにありました。こわれていません。でもってふってみると、チャリチャリというおとがしました。

「おばあちゃん、いらっしやい」

「おや、キリコ。いいこにしてたかい」

「もう、キリコったら。いつまでねぼけてるのよ、そんなものもってきて」

キリコさんは、ブタさんのちょきんばこをもったままでした。

「おや、えらいね。ちょきんするようになったんだね。ひとつ、おばあちゃんからも、おこづかいあげようかね」

おばあちゃんは、ふところから、ちいさななにかをとりだしました。

「おばあちゃん、それ、がまぐち」

「よくしているね。ほら、おこづかいだよ。だいじにきなさいね」

おばあちゃんは、がまぐちのさいふから、ごひやくえんだまをとりだして、キリコさんにあげました。

「ありがとう。だいじにするよ」

おかねをブタさんにいれると、チャリーンという、きもちいいおとがしました。

あひるのアッヒルダー

橋本 佳代子

この町には、こんなへんなかんばんが、立っています。

「『アッヒルダー、アッヒルダー』となく、あひるがいます。みなさん、だまされないように気をつけてください」

ある日のことです。

この町のぼうし工場では、朝から、

「カタカタ、カタカタ」

ミシンをふむ、音が聞こえます。赤や、黄色や、くまの耳がついているのや……。いろんなぼうしが、出来上がっていきます。

「カタカタ、カタカタ」

みんな、休むひまなくミシンをふみつけます。

「カタカタ、カタカタ」

そこへとつぜん

「アッヒルダー、アッヒルダー」

と、聞こえてきました。

工員さんたちは、

「昼だ！ 昼だ！ べんとうだ!!」

「今日は、なんだか、昼になるのが早いなあ」

などと言いながら、おべんとうを広げて、食べはじめました。

そこへ、ここで一番えらい工場長が、おこってやってきました。

「だれが、べんとうを食べてもいいと言ったんだ。まだ朝の、十時だぞ。しごとだ！ し

ごとだ！」

工員さんの、ひとりが言いました。

「ですが工場長、だれかが、『あつ、ひるだあ！ あつ、ひるだあ！』と、言ったもんで、

てつきり昼の、べんとうの時間になったんだと思い……」

また、

「アッヒルダー、アッヒルダー」

と聞こえてきました。工場長は、はっとしました。そして工場中を、さがし回りました。すると、くまの耳がついたぼうしの中から、

「アッヒルダー、アッヒルダー」

と、聞こえてきました。ぼうしの下からは、黄色いあひるの足が見えています。

「さては、あの、かんばんのあひるだな！」

そういうと工場長は、おこってあひるを、つまみだしてしまいました。

このあひるのうわさは広まり、町の人たちは、『アッヒルダー』とよんで、用心するようになりました。

アッヒルダーが、とぼとぼ歩いていると、パンをやくにおいがしてきました。

（いいにおいだな）

アッヒルダーは、思わず入^{はい}っていききました。ここのパンやさんは、学校^{がっこう}のきゅうしよくのパンを、作^{つく}っていました。ちょうど、お昼^{ひる}のきゅうしよくに間^まに合^あうように、パンをやっているところでした。

そこへ、

「アッヒルダー、アッヒルダー」

と聞^きこえてきました。

「えっ、もう昼^{ひる}か！ たいへんだ。早く^{はや}パンを学校^{がっこう}に、はこばないと！」

パンやさんは、やけたばかりのパンを車^{くるま}につみこむと、すごいスピードで走^{はし}りました

学校^{がっこう}につくと、子どもたちは、まだ、べんきよう中^{ちゅう}です。

校長先生^{こうちょうせんせい}が、

「あれっ、パンやさん、今日^{きょう}は、早い^{はや}ですね」

と、言^いいました。

パンやさんが、時計^{とけい}を見ると、まだ十一時^{じゅういちじ}でした。パンやさんは、はっとしました。

「さては、あひるのアッヒルダーのしわざだな」



パンやさんは、店にかえってアッヒルダーを見つけると、かんかんにおこって、ほうりだしてしまいました。

アッヒルダーが、とぼとぼ歩いていっているうちに、気がつく、あたりはまっくらになっていました。

「もう、夜だ。このへんで休もう」

アッヒルダーが、つぎに入ったところは、新聞やさんでした。新聞やさんは、朝早くおきて新聞を、はいたつします。そのために夜は、早くねているのでした。新聞やさんが、ぐっすりねているところに、

「アッヒルダー、アッヒルダー」

と、聞こえてきました。新聞やさんは、びっくりして、とびおきました。

「えっ、もう昼か、たいへんだ。ねすごした！」

あわててパジャマのまま、外に出ました。ところが、そとは、まっくら。星がでています。新聞やさんは、はっとしました。そして、家の中をさがし回りました。

「やっぱり、おまえのしわざだな！」

そう言う^いと、新聞^{しんぶん}やさんは、かんかんにおこって、アッヒルダーを、おいだしてしまいました。

アッヒルダーは、しょんぼりしていました。

「ぼくは、どこへいっても、おこられて、おい出^だされてしまう。ただ、ないているだけなのに……。どうしてぼくは、ほかの、あひるみたいな声^{こゑ}が出^でないんだろう」

アッヒルダーは、口^{くち}ばしをなんとか、「ガ」の形^{かたち}にして、

「ガッ、ガッ」

と、なこうとしました。

「ガ」

でも、出^でてくる声^{こゑ}は、

「アッヒルダー」

もういちどやってみました。

「ガ」

「アッヒルダー」

何^{なん}どやっても、同^{おな}じでした。アッヒルダーは、けっしんしました。

「もうぼくは、なくのを、やめよう。どんなことがあっても、なかなかぞ。そうしないと、みんなにきらわれてしまうもの」

アッヒルダーは、ずっとずっとだまって、町^{まち}をとぼとぼ歩^{ある}いていました。

そこへ女^{おんな}の人^{ひと}が、だれかをさがすかのように、きよろきよろしながら、やって来^きました。

「あなた、もしかしてアッヒルダー？」

アッヒルダーは、こくんと、うなずきました。

「よかった！ ずっとあなたを、さがしてたのよ。じつはね、あなたにおねがいがあるの。ちよっと、うちへ来て^きくれないかしら」

アッヒルダーは、なんだかわからないまま、女^{おんな}の人^{ひと}について行^いきました。

家^{いえ}の中^{なか}では、男^{おとこ}の子^こが、ぐうぐうねています。

女^{おんな}の人^{ひと}は、言^いいました。

「うちの子^こは、すごい朝^{あさ}ねぼうなの。目^めざまし時^{どけい}計^{けい}を、百^{ひゃっ}こ、じゅんばんにならしても、

「こずつ止めて、またねてしまうの。学校は毎日ちこくするし、こまっているの。あなたのなきごえで、朝、この子をおこしてくれないかしら」

あさの七時になりました。

目ざまし時計が、こずつなりはじめました。

「リン、リン、リン……」

「ピ。ピ。ピ。……」

「カン、カン、カン……」

「ジリン、ジリン、ジリン……」

すごい音です。

ところが、男の子は、こずつ止めて、百こぜんぶ止めて、また、ねてしまいました。

そこで、アッヒルダーの出番です。

「アッヒルダー、アッヒルダー」

今まで、なくのをがまんしていたので、いつもより、すごく大きな声が出ました。



男の子は、とびおきました。

「お母さん、たいへんだ！ お昼になっちゃったあ!!」

女の方は、うれしそうにわらって、アッヒルダーのことを話しました。

男の子は、アッヒルダーに言いました。

「きみがアッヒルダー？ すっかりだまされたよ。おかげで、はじめてちこくしないで、学校に行けるよ。本当にありがとう。明日からもおねがいするね」

アッヒルダーは、すぐくうれしくなりました。

(きらわれてばかりいた、ぼくのなき声が、やくに立つなんて！)

アッヒルダーは、この家に、すむことになりました。毎日ごちそうも、食べさせてもらえます。

アッヒルダーは、大まんぞくでした。

でも、一つだけ、がまんしなければならぬことがあります。

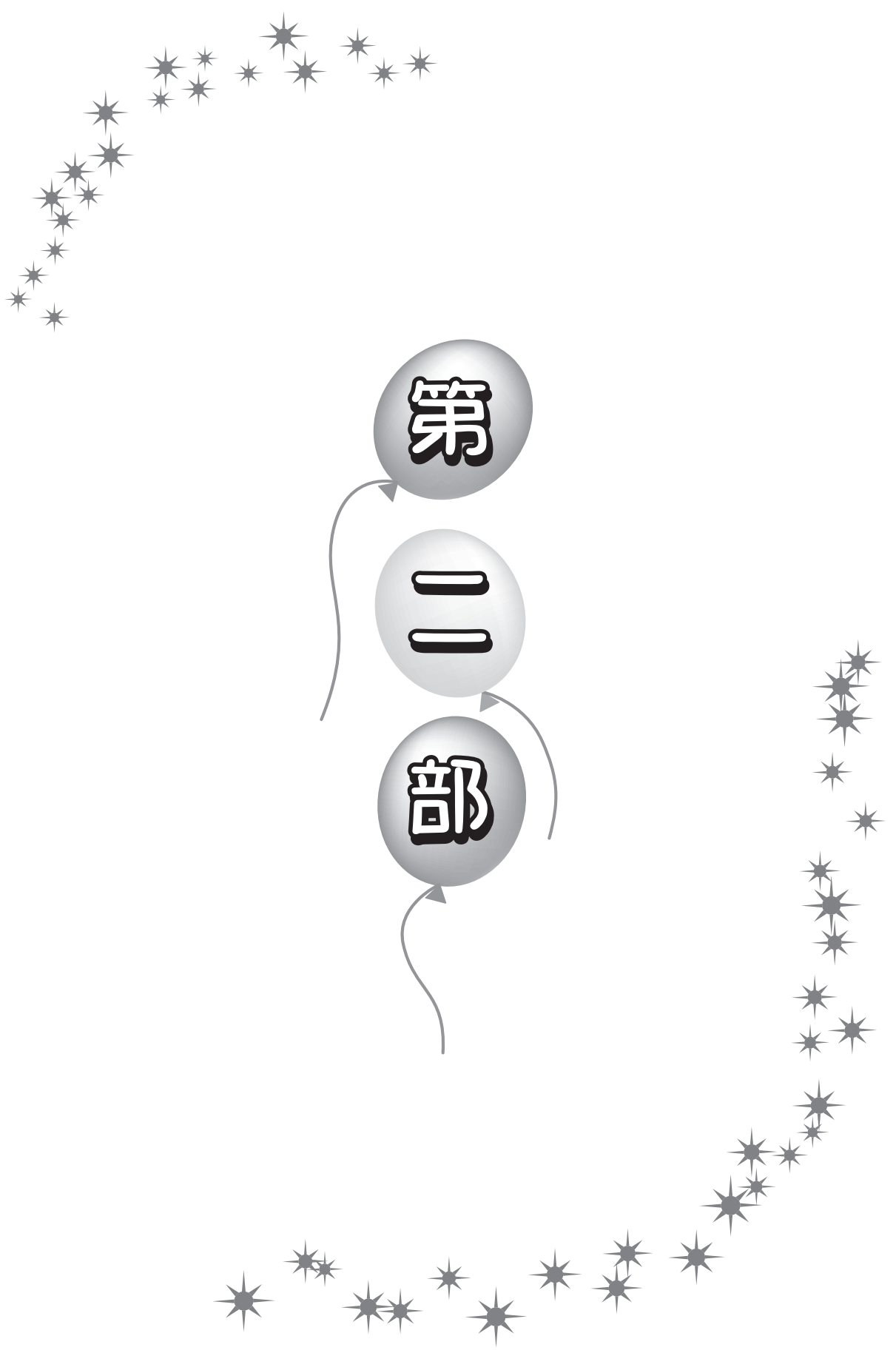
それは、なくことができるのは、朝の七時と、本当のお昼だけ。ということです。

今では、この町の人たちは、アッヒルダーのなきごえでお昼ごはんを食べはじめます。
アッヒルダーは、お昼になると、

「アッヒルダー、アッヒルダー」と、

町じゅう、走り回らなければなりません。

みんなアッヒルダーを、とつてもたよりにしているのですから。



第

二

部

ぼくらのニワトリ奮闘記

みやぞのせいこ

午前三時四十五分。布団に入っただまま手を伸ばして、目覚まし時計を確認する。

(よっしゃ！ 今朝は勝った！)

ぼくは小さくガツポーズをした。となりの布団では大地兄ちゃんが、気持ち良さそうにいびきをかいている。たまに足がこっちにとんでくるけれど、まあ気にしない。今朝のぼくは気分がいいんだ。「あいつ」よりも、早く起きることができたから。と、大きくのびをしたそのとき。

「コオケコッコー！」

あいつの大きな鳴き声がした。あいつ、そう。一番鶏のニワトリ、金四郎だ。時計は午前三時五十分。毎朝きちんと同じ時間に鳴くんだから、さすがは一番鶏だ。

今は春休み中。ぼくらが泊まっているここはじいちゃんの家だけれど、今はばあちゃん

しかない。じいちゃんは、ぎっくり腰で入院中だからだ。市街地から車で二十分ほどの山手にあるじいちゃんの家。じいちゃんとはあちゃんは、家の横にある畑で季節の野菜や花を育てている。忙しい収穫の時期には、ぼくたち家族や親せきも手伝いに駆り出される。母屋の縁側から見えるところに、金四郎たちの鶏小屋がある。飼っているニワトリは、全部で二十羽くらい。鶏小屋は、じいちゃんお手製の自信作だ。小屋の周りを畑の手前まで、ぐるりと柵とネットで囲い、ニワトリたちの運動場も完備。雑草が伸びてきても、野菜くずも、ニワトリたちが食べてくれる。日中、ニワトリが小屋と運動場を、自由に出入りできるように造ってあるんだ。

「ニワトリは、平飼いが一番！ 声もいいし、卵もうまくなる」

前に、じいちゃんは言った。ニワトリたちがいる場所は、いつもきれいに整えてある。ふんもめったに溜まっていないうし、土だってふかふか。臭くない。ニワトリたちは日中、運動場に放し飼いにしても、ちゃんと夕方には小屋に戻って眠る。

じいちゃんのニワトリを紹介すると、オスは三羽だけで、あとはメス。オスで体が大きい順に、「金四郎」「銀次」「銅丸」という名前だ。ちなみにじいちゃんの名前は、四郎。オリンピック観戦を、四年に一度の楽しみにしているじいちゃん。自分の名前にプラス、



メダルの色になぞらえて、ニワトリに名前をつけた。オリンピックのメダル級に、大切に愛情たっぷり飼っているニワトリたちなんだ。中でも一番体の大きな金四郎は、じいちゃんにとって特別自慢のニワトリらしい。茶色い個体が多いじいちゃんのニワトリの中で、ひときわ目立つ白くて大きな体。深い赤色のとさか。アーチを描く尾。ごつごつした足なんて、鳥というより、どちらかと言えば爬虫類みたいだ。金四郎の方も、じいちゃんの愛情を分かっている。じいちゃんの肩にはしょっちゅう乗っているし、後について回る。じいちゃんに限り、手からえさも食べる。

「おはよう、みんな。ごはんだよー」

ぼくはニワトリたちに声をかけた。小学校に上がった頃から、ニワトリの世話を手伝うようになったぼくだけれど…。

「いやだ。こわいよ。もう出る！」

初めて入った鶏小屋で、ぼくはべそをかけた。鶏小屋の中は、完全にニワトリたちのテリトリーだった。居心地悪いことこの上ないぼくに向けられる、ニワトリたちの目、目。四つ年上の大地兄ちゃんの後ろにぴたりくっついて、ニワトリに目も合わせられなかった。ああ、今思い出しても、恥ずかしさがこみあげてくる。あれから3年が経っ

て、この春、ぼくは四年生、兄ちゃんは中学二年生になる。さすがにニワトリはもうこわくないし、世話にも慣れた。ぼくを見て、寄ってくるニワトリだっている。なにより、生みたて卵の卵かけごはんがおいしい。自分でしっかり世話をしたニワトリからいただく卵。一日のエネルギーの源だと毎朝感じる。

だけどやっぱり、あいつ、金四郎だけは苦手だ。ただならぬ威圧感を感じる。ぼくが掃除のために小屋に入っていると、外の砂浴び場から、ぼくをじっと監視している。ぎろりと金色の目を向けられると、ぼくはどきどきして、体が固まってしまう。

「おはよう。海斗。いつもはやいなあ」

夜が明けて、ニワトリ小屋の掃除をしていると、やっと兄ちゃんが起きてきた。

「おはよう。にいちちゃん。卵は台所。ばあちゃんに渡してあるよ」

「おー。サンキュー。じゃ、ちよつと行ってきます。」

そう言うと兄ちゃんは、軒下に干されていたランニングシューズを取った。バスケットボール部に入っている兄ちゃんは最近、レギュラーの座をかけた練習が忙しいらしい。

「オレは部活あるから。ごめんな!」

と言って、今みたいにすぐに出かけてしまう。思えば兄ちゃんは、小学生の頃からスポー

ツ全般が大好きだった。

兄ちゃんとは反対に、ぼくはスポーツのおもしろさが、いまいちわからない。スポーツ観戦なら楽しいけれど。見ているのと実際にするのは、天と地ほどの差がある。体育の時間、ぼくは授業を適当にやりすぎす。早く終わってくれ、と願う。体育より、校庭の隅にある飼育小屋や学級花壇の様子の方がどうしても気になる。準備運動をする兄ちゃんを見ながら、ぼくは掃除を続けた。

「じいちゃんねえ、もうじき退院できそうよ」

お昼ごはんの後、ばあちゃんが言った。ぼくは読んでいた図鑑から顔を上げた。

「マジ？ よかったな、海斗！ ニワトリから解放されるぞ！」

ゴロゴロしていた兄ちゃんが起き上がって、ガシッとぼくの肩を抱いた。

「いやいややってるわけじゃないけど」

「へっ？ そうなのか？ おまえ、ニワトリこわがってたじゃん」

兄ちゃんは首をかしげている。わかっていないな。ぼくは少しムツとする。

「大ちゃんにも、海ちゃんにも。本当に心配かけたねえ」

申し訳なさそうに言いながらも、ばあちゃんはニコニコ笑っている。ここ最近で、一番

明るい顔かもしれない。じいちゃんに退院のめどが立って、ほっとしたのだろう。

じいちゃんの留守を守って完璧に、とまではいかないけれど。ばあちゃんの助けになれるなら、来た甲斐がある。それに、できなかったことが、だんだんできるようになるって気持ちがいい。すぐ逃げる兄ちゃんとはともかく。ぼくは、来てよかったなあと思う。

「もしもし、じいちゃん？ おはよう。腰の具合、どう？」

朝ごはんの後、ぼくはばあちゃんのスマートフォンを借りて、入院中のじいちゃんにテレビ電話をする。じいちゃんの体調を聞いたり、ニワトリたちの様子を報告するためだ。

「おお、海斗。おはよう。おかげさんで、腰はだいぶいいぞ。今朝の卵はうまかったか？」

「うん、ばっちり。おいしかったよ。ええとまず、体調が悪そうなニワトリはなし、けが

もなし。エサの減り具合も、いつもと同じくらい。小屋と運動場にも異常なし。金四郎は、今朝もきっちり三時五十分。大丈夫かな」

ぼくは、観察日記風に書いたメモを読み上げた。

「そうかそうか。ありがとうな。海斗がそう言うなら、大丈夫だろう」

じいちゃんは、ニコニコ顔で言った。ぼくはなんだか照れくさくなって、

「だけど、あいつ。金四郎だよ。いつもにらむんだ。ぼくを敵だと思ってるよ、絶対」

じいちゃんに、金四郎のことを告げ口した。

「はっはっは！ てえことは、二人はライバルか！ こりゃあいい！」

じいちゃんの大爆笑を、久しぶりに聞いた。声に力がある。前よりずいぶん元気になった感じがして、ぼくはほっとした。

「ああそうだ、海斗。テンには気をつけろよ」

電話を切る前に、じいちゃんが言った。ぼくはどきりとした。テン、黄色い体の、イタ科の野生動物。イタチよりは大きくて、雑食性。フェレットにちよっと似ている。大胆不敵で、ニワトリも狙う。何年か前、じいちゃんのニワトリ小屋は、テンの襲撃を受けた。ニワトリが何羽か、犠牲になったらしい。

「冬の間、何度かふんを見かけたんだ。ふんを見つけたら、注意したほうがいい。」
テンは目立つ場所に、ふんを残す習性がある。畑や家の敷地内で見つけたら、近くまできている証拠だ。

「わかった。兄ちゃんにも言っておくね」

「ああ、頼んだぞ」

電話を切って庭に出ると、メスのニワトリが「クークツ」と小さく鳴きながら、ミミズ

をつついていた。

「コケコッコー！」

今朝の金四郎も、ぴったり午前三時五十分。遅れて二番鶏の銀次、三番鶏の銅丸が朝を告げる。ニワトリの世界にも、力関係の序列があるらしい。昨夜から降り出した雨は、日中、雨足が強くなった。

「練習ないし、雨だし、暇すぎ」

兄ちゃんがぼやく。居間のテレビ画面からは、人気テーマパークの特集が流れている。ばあちゃんはさつき、町内会の集まりに出かけた。雨の日のニワトリたちは、たまに声を上げるけれど、小屋で静かにしている。外は夕方みたいに暗くて、鈍色の空から吹いてくる強めの風が、家の中にまで入ってくる。まだこれから雨足が強くなることを、予感させる冷たい風。

「ココッ、ココッコケー！ コケー！ ケー！」

不意に聞いたこともないくらい、大きなニワトリの鳴き声がした。すぐさまぼくらは縁側から、ニワトリ小屋の方を見た。

黒っぽい影がふわりと、ニワトリ小屋の外に踊り出た。

「なんだ！？ テンか！？」

「いや、テンにしては大きいよ！ 犬！？」

ぼくたちの声に、黒っぽい影がこちらを向いた。ぴんと立った三角形の耳、長い鼻としっぽ。つり上がった鋭い目。大きさは中型犬くらいある。テンではない。キツネだった。

「うそだろ！？」

ぼくらは信じられなかった。この辺りでは、キツネの目撃情報なんて、ほとんど聞いたことがない。ぼくもキツネなんて、図鑑か動物園でしか見たことがない。いくらじいちゃんの家が山手にあるからって、まさかそんな。真昼間からキツネが出るなんて。頭の中が、どんどんパニックに変わる。縁側から飛び出して、運動場の前に立った瞬間、ぼくは凍りついた。キツネの口にはメスのニワトリが一羽、咥えられていたからだ。

「ちくしょう！ またやられてたまるか！」

兄ちゃんは、庭ホウキを手には運動場に入ろうとした。見ると、運動場周りに立ててある柵の、支柱の一部がむき出しになっている。雨で土が流れてしまったのか。ネットがゆるんで倒れやすくなったところに、すき間からキツネが押し入ったのだろう。

「待って！ 兄ちゃん！」

ぼくは止めた。なぜなら

「コケーッ！」

ぼくらとにらみ合っているキツネの眉間めがけて、金四郎が飛びかかったから。どこに潜んでいたのか、キツネの一瞬のスキをついた金四郎。

「ギャン！」

キツネは頭を振りかぶって、その拍子に咥えていたメスニワトリを放した。小屋の中は大騒ぎになっている。一番鶏の雄叫びに、みんなパニックになってしまったんだろうか。たくさんのニワトリがバサバサと騒ぎ、小屋から出てきてしまうものまでいる。

「あっ、だめだ！ 出るな！」

「海斗！ ネットを上げろ！ キツネを追い出すぞ！」

兄ちゃんに言われて、ぼくがネットに手をかけたそのとき。

「ココケー！ ケー！ ケー！」

振り向くと、キツネが金四郎の喉元に噛みついていていた。「グルルル」という、キツネの唸り声が聞こえる。金四郎は身をよじって間一髪、キツネから逃れた。羽を大きく広げて、蹴りの体勢に入る。

「もうやめろ！ 金四郎！」

ぼくは叫んでいた。金四郎の首に、赤いものがにじんでいた。雨に濡れて、みるみる広がっていく。

「うおおおおお！」

兄ちゃんが聞いたこともないような声で叫びながら、庭ホウキを振り下ろした。足元を払われたキツネは驚いて、大きく開かれたネットから、一目散に逃げていった。

雨の中、どれくらいの間、キツネと戦っていたんだろう。ニワトリの羽が小屋のあちこちに張りついて、地面にもいっぱい散らばっている。倒れている金四郎と、メスのニワトリの体は、雨に打たれて少しも動かない。

「金四郎！ しっかりしろ！ 金四郎！」

ぼくは呼びかけたが、金四郎もメスのニワトリも反応しない。

「海斗、今は急げ！ 柳田さんのところに行くぞ！」

兄ちゃんが縁側から叫んだ。手には電話の子機を持っている。落ち着きを取り戻しつつあるニワトリたちを残し、ぼくらは走った。金四郎たちを抱えて。

「何かあったら柳田さんだ」



じいちゃんの言葉を思い出す。柳田さんなら、ぼくも知っている。ずいぶん前からいいちゃんと親しい、近所の獣医さんだ。ニワトリのことも詳しくて、じいちゃんはいつもお世話になっていると言っていた。

「がんばれ！ 海斗！ もう少しだ！」

兄ちゃんが振り返って言った。雨の中、手負いのニワトリを抱いて走る。どうしても兄ちゃんに遅れてしまう。必死でついて行くけれど、兄ちゃんの背中には追いつけない。息も苦しいし、手足も重い。濡れたアスファルトは、スニーカーを滑らせる。長靴よりは走りやすいと思ったのに。せめてもう少し、速く走れたら。ああ、やっぱり体育も必要なんだ。だけど、今さら後悔したって遅い。金四郎たちはもっと痛いはずだ。タオルにくるんだ金四郎は、ぐったりと動かない。もしかすると、もう…。

「おお、よく来た、二人とも！ 大きくなったなあ！」

駆け込んだぼくらに、柳田さんはあっけらかんと言った。

「キツネが出たって！ とんだ災難だったなあ。どれどれ、ふむ。ケガと…。ああこれは、二羽とも気絶しとるな。ニワ、トリだけに」

柳田さんは一人、ぬはっと笑った。ぼくらを和ませようとしてくれたのだろう。だけど

ぼくらは、笑うどころじゃなかった。

「えっ？ 気絶？」

「ああ、死んでないから大丈夫。さて詳しく診てみようかね。君たちは、とりあえず体を拭きなさい。風邪でもひいたら、四郎さん：じいちゃんにボクが叱られる」

柳田さんはまた、ぬはっと笑って、テキパキと動き出した。あっけにとられたまま、ぼくは待合室の長イスに座らせてもらった。借りたタオルで拭いていると、全カダッシュした両足が、がくがくと無意識に動いた。

「大丈夫か？」

兄ちゃんが、外の自動販売機で買ったジュースを差し出した。

「うん、ありがとう」

ジュースを飲むと、足のたるさもあるせいかな、一気に力が抜ける。

「兄ちゃん、よく柳田さんのこと思い出したね。キツネも追い払ったし。ぼくなんて、ずっとパニックしてたのに。すごいや」

ぼくはとなりに座った兄ちゃんを見た。

「別に。テンのときも柳田さんに助けてもらったからさ」

しばらく間をあけて、兄ちゃんは続けた。

「オレだって。必死過ぎて、声ひっくり返ってたし。で、あのさ。ニワトリ、いつも押しつけてばかりでごめんな」

そっぽを向いたまま、兄ちゃんは小声で言った。

「大丈夫。慣れたらわりと楽しいよ」

きまりが悪そうにしていた兄ちゃんは、ぼくの方に向き直った。

「うへー、そうか？ だけどさ、金四郎がキツネの攻撃を受けても無事だったのは、多分、毎日おまえがママに健康チェックとかしていたからだと思うよ、オレは」

珍しい、兄ちゃんがぼくをほめている。だけど、ぼくは…。

「いや、ぼくの方こそ、今回のことでわかったよ。体育も必要なんだって。走れないと、いざというときに動けないんだね。まず第一に体力なんだ」

ぼくはさっすきの苦しさを、感じたままに伝えた。

「体育？ うん、まあ体力は、大事だよな！」

兄ちゃんはピンときていないようだったけれど、金四郎たちは、しばらく柳田さんの動物病院に入院することになった。

翌朝、兄ちゃんと二人で、じいちゃんに電話をかけた。

「ごめんなさい」

ぼくらは謝った。じいちゃんの大切なニワトリが、金四郎が。雨のせいとはいえ、柵のゆるみは気持ちのゆるみ。結果として、キツネの侵入を許すことになってしまったから。

「二人とも、けがはないか？ キツネに噛まれたりしていないか？」

じいちゃんは柳田さんから、だいたいこの事情は聞いたらしい。ぼくらの心配ばかりして叱らなかった。その代わり、新しい柵の立て方を教えてくれた。

「長くこの辺りに住んでいる柳田さんですら、キツネに遭遇したことはないらしいぞ」

「でもまさか、昼間に出てくるなんてさ」

ぼくらは地元の人でもめったに見られない、珍しい動物に遭遇したわけだ。

「まあ幸い、二羽ともたいしたことはなさそうだし。柳田さんに任せておけば大丈夫だろう。大地、海斗。二人とも、金四郎たちを守ってくれて、ありがとうな」

じいちゃんは深々と頭を下げた。ぼくは首を横に振った。ぼくらが金四郎たちを守れたことになるんだろうか。ひるむことなく、キツネに立ち向かった金四郎。一番鶏らしい

勇猛果敢な姿。

「それにしても。仲間の犠牲も出さずに、キツネと痛み分けとは。さすがは金四郎、男前だ。それなら、わしのほうが先に退院してやる！ 金四郎には絶対、負けてられん！」

じいちゃんは胸を張る。ぼくらは顔を見合わせた。

「金四郎とわしは、永遠のライバルだからな。二人ともあと少し。わしが戻るまで頼んだぞ」

じいちゃんは、ピースサインをした。そうか、じいちゃんにとっても金四郎はライバルなのか。いつも近くで、愛情と信頼を送り合って。負けたくない、自慢の相手。じいちゃん金四郎のことをかわいがりつつも、お互いによきライバルとして認めていたんだ。

じいちゃんに教えてもらった通りに柵を修理してから、僕らは鶏小屋の大掃除をした。ニワトリたちはもう、昨日の出来事は忘れてしまったみたいに普段通りだ。

「おはよう、みんな」

雨上がりの太陽が、きらきらと庭を照らす。よきライバル同士、二人の帰還をぼくらは心待ちにしている。

白い鳥

たぬきたぬこ

金曜日、学校から帰ると、いつもはおやつを頬張っているはずの一下下の妹が、泣きながら机で手紙を書いていた。

「どうしたのだよ？ 何かあったのか？」

妹は涙のにじんだ目でぼくを見上げて言った。

「お兄ちゃん、誰にも言わない？」

「うん。」

「お父さんにも、お母さんにも、おじいちゃんやおばあちゃんにも、絶対に言わない？」

「うん。」

「私ね・・・。」

妹は手紙を書く手を止めて、ため息をついた。

「いつも一緒に帰って来る三人組の二人から無視されているの。」

「ええっ？ 無視？ 何で？」

「分からない。ずっと三人で楽しくおしゃべりして帰って来たのに、急に私を仲間はずれにするのよ。」

「いつから？」

「昨日から。私、何か悪いことをしたのかなあ？ って、ずっと考えたのだけど理由が分

からないの。」

そう言うと、妹は声を出して泣き出した。

「お、おい、大丈夫か？ 気のせいじゃないのか？」

「そう思って、昨日は過ぎしたわ。でも、今日も同じだったから、もう、これは間違いないと思うの。」

「無視、って誰も口をきかないでだまっているってことなのか？」

「それだけじゃないわ。二人で目配せして、私を見てひそひそ話したり、突然二人で走り出して、歩いている私を残して帰っちゃったり。」

妹は机に突っ伏して泣いた。

「すごく、辛い。」

ぼくは床に座った。妹の話をじっくり聞いて、助けてやれることはないかと考えたからだ。

「自分が邪魔にされて、自分がばかにされている感じがする。それって、すごくムカつくよ！」

「うん、そうだな。」

「話し合いで解決したくても、あっちは口きかないじゃない？ それに今日は金曜日だから、明日、明後日と学校がお休みで会えないから、来週まで解決しないままになっちゃうのよ。そんなの嫌！」

「そうか。だから手紙を書いて、その二人の友達に渡そうとしているのか？」

「違うわ。お手紙渡しても受け取るはずないじゃない。私を無視しているのだから。」

「そうか。じゃあ、何で手紙を書いているのさ？」

「これは白い鳥に渡すために書いているの。」

「白い鳥って？ 何だ？」

「え？ お兄ちゃん、白い鳥のことを知らないの？」

僕はまったく白い鳥の話なんて知らなかったの、大きくうなずいた。

「白い鳥はね、鳩くらの大きさの鳥でね、いじめられた人と、いじめた人の関係を取り持つ鳥なの。」

「へええ。知らなかった。そんな鳥がいたのか。」

「うん。いじめに悩んで解決出来ない時に、いじめる相手にお手紙を書いて、封筒に白いリボン巻いて窓の外にしばりつけておくと、白い鳥が届けてくれるのよ。」

「初めて聞いた！」

ぼくはびっくりして、思わず立ち上がった。

「でも、相手の住所が分からない場合はどうするのだよ？」

「それが大丈夫なのよ。心の中で真剣に相手のことを考えて書くと、白い鳥はお手紙の中の心を頼りに、相手の所に運んで行ってくれるのよ。」

「へええ、これまたすごいな。でも、相手が手紙を受け取らなかったらどうするのだ？」

妹は頭を大きく横にふった。

「絶対に受け取るの。白い鳥からのお手紙はどの子も受け取らないといけない気持ちになるのだって。」

そんなこともあるのか。ぼくはうなずいた。

「そうか、それで手紙を書いているのだな。」

「そう。白い鳥はお手紙を運んで、お返事を持って来てくれる。いじめがなくなるまで、ずっとお手紙を運んでくれるのだった。」

僕はふと考えた、でも、鳥だろう？ 人に頼んだ方が手取り早いんじゃないか？

「親に相談した方が早いんじゃないか？」

「だめよ。誰にも言いたくない、って言ったでしょう？ それに親に言って、学校で騒ぎ立てられたら、もっといじめられちゃうかもしれないじゃない。」

「まあ、そうだね。」

そうかもしれないな、と思うなずいた。妹は涙のにじむ目で僕をみつめて小さくため息をついた。

「お兄ちゃんはいじめられたことがないのね。」

「そうかもしれない。」

「だから白い鳥のことも知らないのよね。」

そうだった。いじめに余り関心がなかった。

「いじめたことは？」

「ええっ？」

「いじめた方も、いじめられた人にごめんなさいってお手紙が書けるのよ。」

「そうなのか。」

妹は手の甲で涙をぬぐい、机に向き直った。

「じゃあ、私、お手紙書いちゃうから。」

「うん。」

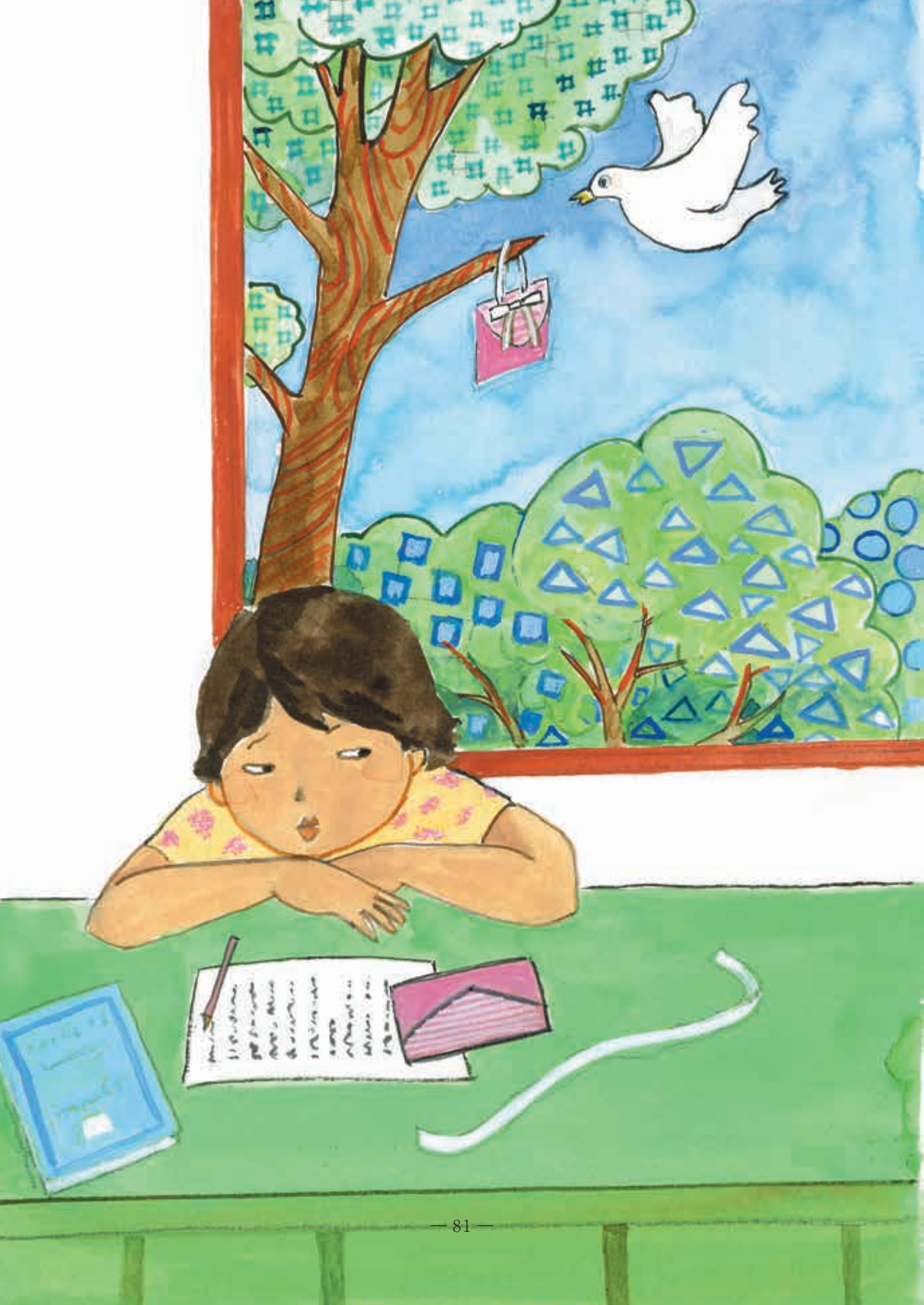
妹がまた手紙を書き始めたので、ぼくは部屋を出た。

ぼくは一人でおやつを食べながら、ぼんやりと二年前、小学校四年生の時のことを思い出していった。

クラスに上原君という、勉強が出来る、明るく優しい性格の子がいた。上原君は誰からも好かれていた。クラスの人気者なのに、いい気になることもなかった。

上原君はどんなことでも、いつも一生懸命にやっていた。給食当番も、掃除も、苦手な体育も。

僕は体育だけは上原君よりも上手に出来た。上原君は走るのが遅いし、ボールをパスし



ても必ず落としてしまう。一生懸命だけれど、体育の時間はカッコ悪かった。僕の方がずっと、ずっとカッコ良かったはずだった。

それなのに、僕が好きだった女の子が上原君を好きだと知った時には、怒りがわいてきた。

「何で上原君だけがモテるのだよ！ あんなにダサいのにな！ 憎らしい。」

そういう気持ちになっていたのはぼくだけじゃないと知った。他に二人の男子がいた。かげで上原君に対する不満を言っているうちに、三人で上原君に怒りをぶつけることになっていった。

最初は無視から始めた。そしてその頃、体育でサッカーの授業があった。僕たちはわざとサッカーボールを上原君に向けてシュートした。体育が苦手な上原君はボールをよけ切れない、そう分かっていった。

案の定、ボールは何度も上原君を直撃した。それでも上原君は途中でやめずにサッカーを続けた。

サッカーの授業の度に、シュートミスをよそおってボールを当てたので、上原君の体操服には洗っても消えないくらいにボールの跡が残り、体にはあざや傷が増えていった。



それでも上原君は一度も泣かなかった。

今考えると、いてもたってもいられないくらいに残酷で、自分の体がサッカーボールを当てられたような痛みを感じる。

でも、何でだろうか……。あの時の僕たちは、いつの間にか上原君を泣かせることが目標になっていたのだ。

昨日も泣かない、今日も泣かない、泣くまで続けてやる。目標を持った三人は、上原君の体のことも気持ちのことも考えてなかった。僕たちは思い通りに泣かせられない上原君に、いらだちを感じ、それを、

「ムカつく。」

という言葉にした。

「上原、ムカつく。」

最初はこそ隠れていた悪口だったが、言うことに慣れていくと、いつしかクラス全員の前で、大声で言えるようになっていった。もちろん、上原君が教室にいる時でも言った。

「上原ムカつく！」

それでも上原君は何も変わらなかった。でも、僕たちの言葉を聞いたクラスメートたちは変わっていった。いつの間にか、上原君を無視する人が増えていった。クラスのどこかで、

「上原、ムカつく！」

そういう声をたびたび聞くようになった。

今思うと、そう言っていた人たちは、上原君に何かされた訳ではなく、自分が思う通りにならなかった時に、上原君のせいにして不満を爆発させていただけだったのだ。

時々、もしかして僕は悪いことをしているのかな？ と、思うことがあった。上原君にサッカーボールが当たると、無事であってくれ、と思うこともあった。でも、いつも、いつも、クラスのどこかで、

「上原ムカつくー！」

と言っているのを聞くと、上原君がムカつかせるから悪いのだ、悪いのはぼくじゃない、という気持ちになっていた。

上原君はそのことを誰にも言わなかったのだらう。先生も知らない。親たちも知らない。大人は誰も知らなかったはずだ。だから、僕たちがしていることがどういふことなのか、

教えてくれる人は誰もいなかったのだ。

春休みが終わるとクラス替えがあった。僕たち三人は全員、別のクラスになった。上原君はお父さんの転勤で、隣町に引っ越したと聞いた。顔を見ないうちに、僕はいつしか上原君のことは気にならなくなっていた。思い出すこともなかった。

そして二年が過ぎた。そのことを忘れていた。でも、さっき妹の泣いている姿を見て思い出した。そして、分かったのだ。

あの時は気付いていなかった。だが、あれはいじめだったのだ。僕はいじめをしていたのだ。

無視されていることがとても辛いと妹は泣いていた。上原君はクラス全員に無視されていた。サッカーボールを当てられていたのだ。僕たちの前では泣かなかったけれど、家に帰って、一人の時にどれだけ涙を流したことだろう。どれだけ怒り、傷つき、苦しんだことだろう。僕はやってはいけないことをした。間違えていた。心の中が真っ暗な闇のようになった。僕はほんでもないことをしてしまったのだ。

夕飯の時には、妹はいつも通りにシチューを食べていた。お父さんとも、お母さんとも、普通に話していた。あんなに泣いていたのに、いつも通りにふるまっていた。

僕は妹に小声で聞いた。

「白い鳥、どうした？」

「お手紙、持っていてくれたわよ。」

「まだ解決してないのか。」

「まあね、でも何とかなるわ。白い鳥がいるもの。」

妹が力強くうなずいた。

夕飯の後、僕は一人で机に向かって考えていた。白い鳥は、いじめた方から、謝る手紙を書いて届けてくれると言っていた。僕は上原君に手紙を書こうか考えた。悪いことをしたら謝らなければならない。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

妹が勢いよく、僕の部屋に入ってきた。白いリボンと封筒を二つ持っている。

「お返事来たよ。仲直り出来たよ。」

「そうか、良かったな。友達、何だった？」

「うん。私、ちよと、教えたがりの所があるじゃない？」

「あ、ああ。」

「それがたまにいき過ぎて、上から目線になってしまふみたい。友達はそのいう時に嫌だと思つていたけれど、言えなくて、意地悪したら気付いてもらえと思つたのだから。」

「ふうん、上から目線か。僕は慣れているから気にならないし、無視しなくても他に方法があると思うけれどな。」

「うん、無視されたらどんなに辛いか考えてなかったから、ついしてしまつたって謝つていたわ。」

「そうか。」

「だから今度から、お互いに意地悪はなしで、相手の気持ちを考えながら、自分の気持ちを伝え合うことにしたわ。」

「そうか。じゃあ、一件落着だな。」

「うん！」

妹がニコニコしている様子を見て、僕も上原君に手紙を書いてみようと思つた。

僕は何度も、何度も書き直しながら手紙を書き上げた。まずは謝り、それからいじめてしまつたいきさつやその時と今の自分の気持ちを書いた。もう二度としないとも書いた。書いた手紙を読み返しながら、上原君がこの手紙を読んで、妹のように笑ってくれたら

良いな、そして僕も上原君に許してもらって、心がスッキリ出来たら良いな、と思った。

書いた手紙は封筒に入れて白いリボンを巻いて窓の外にくくりつけておいた。外は暗くなっていたが、どこからともなくハトくらいのおおきさの白い鳥が飛んできて、リボンのしをくわえて飛んで行った。それを見届けてから僕はベッドに入った。

朝になった。窓の外に白い鳥が返事を持って来てくれているかもしれない。僕は飛び起きて窓を開けた。

空は快晴だった。初夏の爽やかな風が吹く、気持ちの良い朝だ。だが、白い鳥はいない。上も下も、右も左も見たがどこにもいなかった。

おかしいな。妹には数時間でお返事が来たじゃないか。でも幸いなことに今日は休日だ。どこにも行かないで家で待つことにしよう。

僕は昨日の妹の笑顔を思い出した。僕も一件落着にしたいのだよ。このことは、解決しなければ僕自身もつらいのだよ。上原君だって、ずっと辛い思いをしてきたはずだから、僕に謝ってほしいよね？

お天気が良いというのに僕はどこにも出かけず、一日中、上原君からの、許すよ、と書かれた手紙を待っていた。しかし夕方になってもお返事は来なかった。僕は心配になって

きた。

上原君、許してくれないのか？　こうやって僕がヤキモキする様を想像して、仕返ししたような気持ちになってクスクス笑っているのか？

それともお返事もかけないくらいに、体調が悪いのか？　まさか、サッカーボールを当てられた後遺症があるのか？　だとしたら僕はどうしたら良いのだろう。親に話さなければいけない。

日が暮れても白い鳥は現れなかった。僕は不安で、夜もろくすっぽ眠れなかった。

朝が来た。窓を開けて外を見た。台風が近付いていると親が言っていたが、空はよく晴れていた。でも、手紙はなかった。

丸一日待ったのだ。出来たら一人で解決したかったのだが、僕の心は不安で爆発しそうだ。仕方なく妹に相談することにした。

仕方なく、というのは、本当は話すのが嫌だったからだ。僕がいじめをしたこと、そのことで上原君に手紙を書いたこと、それにお返事が来ないで不安になっていることを誰にも知られたくなかった。

だが、妹だ。大人みたく叱りはしない。それにそんなことをする僕だと知っても、離れ

ていくこともないだろう。妹だって、友達とのことを僕に泣きながら話してくれた。みっ
ともない姿を見せ合っても良いだろう。

僕は妹に部屋に来てもらい、上原君に僕がしてしまったことを話した。そして一昨日、
手紙を書いたのだが、まだお返事が来ないと言った。妹はじっと話を聞いていた。僕はた
ずねた。

「白い鳥はちゃんと手紙を届けてくれたのだろうか？」

妹は僕をしつかり見すえて言った。

「白い鳥は嵐で雷鳴がとどろく時でも、凍り付くような真冬の雪が降り積もる時でも、必
ずお手紙を届けてくれるわ。」

僕はびっくりした。

「本当か？　すごいな。でも、白い鳥は何でそんなに頑張るのだ？」

妹は僕を見すえたまま言った。

「白い鳥はとても優しい鳥で、人間のいじめを見ると、ひどく胸が痛むらしいわ。だから
この世からいじめをなくそうと一生懸命に頑張ってくれているのよ。」

妹は僕をにらんでいるように見えた。

「その白い鳥をうたがうなんて。」

「ごめん。余りにも返事が届かないから、不安になっちゃって。」

妹は下を向いて言った。

「お返事が来ない場合もあるのよ。」

「え？　どんな場合？」

僕はつばを飲んで妹を見つめた。

「お手紙を届けた相手が、もうこの世にいないとか。」

僕はその言葉を聞いたとたんに、頭の中が真っ白になった。全身の力が抜けていき、その場にしゃがみこんだ。

僕らのいじめのせいで上原君が自殺なんてしたら、そんなひどいこと、ないだろう。そんなことをする自分は、自分でも許せない。そんなこと、そんなこと。

妹が僕の腕をゆすった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんったら！　しっかりして！　立ち上がって。」

僕はよろよろと立ち上がった。

「お兄ちゃん、その人、隣町に越した上原君、って言っていたよね？」

「うん……。」

「その人^{ひと}だったら、大丈夫^{だいじょうぶ}。」

「え？ 何^{なん}で分かるのだよ？」

「先週^{せんしゅう}、サッカーやっているクラスの男子^{だんし}が、隣町^{となりまち}との試合^{しあい}で、昨年^{さくねん}までうちの学校^{がっこう}にいた一つ上^{ひと うえ}の上原君^{うえはらくん}って人と練習試合^{れんしゅうしあい}したって話^{はな}していたのを思い出し^{おも}たから。」

「本当^{ほんとう}か？」

「うん。」

「すごくサッカー上手^{じょうず}なのだって。パスは正確^{せいかく}、ドリブルは早く、シュートもバンバン決^きめてすごい人^{ひと}だって絶賛^{ぜっさん}していたわ。」

「え……？ あの^{うえはらくん}上原君^{うえはらくん}が？ でも上原君^{うえはらくん}は運動^{うんどう}が苦手^{にがて}だったよ。」

「それがね、その男子^{だんし}が余^{あま}りにサッカーが上手^{じょうず}だからコツを教^{おし}えてもらおうと思^{おも}って聞^きいたら、元々^{もともと}は運動^{うんどう}が苦手^{にがて}だったって言^いっていたって。」

「じゃあ、あの^{うえはらくん}上原君^{うえはらくん}かな。」

「僕は^{ぼく}体中^{からだじゅう}に血^ちの気^けがもどってきた感^{かん}じがした。ああ、良^よかった。上原君^{うえはらくん}はこの世^よにいてくれた。」

「でも、サッカー下手だったけれどもな。」

「だから、ものすごく練習したのだって。サッカーを上手に出来る自分になりたかったから、って。」

上原君らしい。何事も一生懸命なのだ。

「だから、上手くなりたければ、闘う相手は自分だよ、って言ったって感心していたわ。」
僕も感心した。そんな考え方は僕の中になかった。

だが、生きていて、手紙を受け取っているのだとしたら、何で僕にお返事が来ないのだろうか。

「じゃあ、何で返事くれないのだろう？」

「そういう時は、もう、新しい生活のスタートが切られ、前に向かって進んでいる時だっ
て。」

「それでもお返事くらいくれても良いじゃないか？」

「もう、思い出したくない、お兄ちゃんと関わらない生活をしたってことでしょ。」

「え？ 僕と関わらない生活をしたって、その言葉は何かショックだな。」

「仕方ないよ、それだけのことをしちやっただってことだよ。」

「そうか……。」

そうなのか。そうだな。僕はひどいことをした。やってはいけないことをした。それなのに、謝って、許してもらえたら僕の罪は帳消しになる、そんな風に考えていた僕は、まだ上原君の苦しみをちゃんと理解していなかったのだ。

妹がお母さんに呼ばれた。友達が遊びの迎えに来たらしい。

「お兄ちゃん、がんばれ。」

僕の肩にポン、と手を置くと妹は部屋を出て行った。

上原君は苦しんで、苦しんで、必死で苦しみを乗り越えて、新しい学校で新しいスタートを切っている。僕が自分勝手なことしか考えていない間に、上原君は、強くなっていた。何て恥ずかしいのだろう、僕は。

謝ったって、許してもらえないこともあるのだと知った。だったら、そういうことはもうしないようにしようと思った。人の存在を大切にしないということは、絶対に、絶対にしてはいけないことなのだ。

それでも、やってしまったことに謝れる機会があつて良かった。謝らないであのまま生きていたら、僕は最低だったぞ。

僕は窓の外を見た。天気曇ってきた。外の空気を思い切り吸い込み、空に向かってつぶやいた。

「上原君、ごめん。本当にごめんなさい。僕はもう二度とあんなことはしない。僕も……僕も頑張るよ。」

遠くに、リボンの端をくわえて飛ぶ白い鳥の姿が見えた。

「白い鳥、ありがとう、僕の所にも来てくれて。僕、二度と君にああいう手紙を託さなくてよい大人になるよ。」

強い風がビューッと吹いた。やはり台風が近付いているのだ。白い鳥はバランスを崩すことなく、風に乗る、ふわり、ふわりと飛んで行った。

明日は月曜日だ。また学校が始まる。

庭いっぱいの白い水仙

樋口 達也

記録的な猛暑が続いていた夏の午後、私は、クーラーの効いたおばあちゃんの部屋でお手伝いをしていた。

「おばあちゃん、この汚い大きな布切れ、捨てるよお」

スキーのステイックみたいに右手と左手で杖をついて、トイレから戻ってきたおばあちゃんは、それを見ると、

「ああ、大風呂敷ね。それは、残しといて。それ、死んだおじいちゃんが、お見合いの時にくれたプレゼント。大風呂敷を広げるって、大げさなこと言うって意味があるよね。ああ、この人ユーマアのある人だと思ってたんよ、その時。それでおじいちゃんとの結婚決めたんよ」

と、言った。私は、心の中で、

「思い出の品は大事だけござあ、断捨離にならんやん」

と言いなながら、「保存」と書かれた大きな段ボールの箱の中にその大風呂敷を入れた。

小学校最後の夏休みがあと数日となったところ、同じ敷地に住むおばあちゃんから、

「愛ちゃん、断捨離の手伝いしてくれんね」

と、声がかかった。

おばあちゃんは、バイト料を出すと言ってくれたが、私は、

「家族でしょ！」

と、きっぱり断った。

手伝い始めて三日が過ぎても、作業がそんなに進んでいなかったのは、おばあちゃんの

「ちよっと待って」とか、「それは、残しといて」のせいだと思った。

その前の日も、埃だらけの古本の束がいくつも出てきた時、束のまま捨てようとしたら、

「それは、ちよっと待って」

が出た。それから、おばあちゃんが、本を一冊ずつ手に取ってめくり始めたから、私は、

「おばあちゃん、一冊ずつ思い出に浸ったったら、日が暮れるよ。断捨離って、捨てるこ

とでしょ。スパッと捨てようよ」

と言った。おばあちゃんは、しぶしぶ、

「じゃ、芥川と太宰と漱石と、『赤毛のアン』だけは、残しといてね」と言うから、私はつい、

「だけって、おばあちゃん、また、いつかこんなに読むつもりなの？」と、言ってしまった。おばあちゃんは、

「それなら、『赤毛のアン』だけにするよ。おばあちゃん、その本のおかげで、小学校の先生が勤まったようなもんでね。その本に出会わなかったら、子どもの気持ちようわからなかった・・・」

と、言った。私は、『赤毛のアン』を「保存」の箱に入れた。

私が生まれる少し前まで、おばあちゃんは私の家で同居していたそうだが、今は、お隣の元の古い家に一人で住んでいる。

春休み、長崎の大学に行っているお姉ちゃんが帰省したとき、

「おばあちゃんの別居は、嫁姑の問題だよ」

と、言った。言ったあと、声を潜めて、

「でも、そんなこと絶対に口に出してはいけないよ。表向きは、年寄りと若い者は食べ物

が合わないとか、自分のペースでゆっくり時間を使いたいとか、おばあちゃんのわがままってことになってるんだからね」

と、ややこしいことを言った。私が、

「嫁姑の問題って何よ！」

と、突っ込むと、お姉ちゃんは、

「あんたは口が軽いから、言・わ・な・い」

だって。

「よし、わかった。じゃ、お母さんに嫁姑問題って何？ お姉ちゃんが言ってたんだ

けどって、聞いてやるうさ」

と開き直ると、お姉ちゃんは、

「わ、わかった、わかったよ」

と、その問題に関するエピソードをいろいろ話してくれた。

例えば、お父さんが、うたた寝しているとき、おばあちゃんがお父さんに毛布を掛けてあげたら、それがお母さんの癩に障った話だとか。みそ汁の味の薄い濃い話題になったとき、お父さんが薄いと言ったら、お母さんがお父さんとしばらく口をきかなかった話

だとか。結局、聞かない方がよかったって思うような、お母さんとおばあちゃんの十年以上も前の些細なもめごとの話を、お姉ちゃんは、よく覚えていて、面白おかしく話してくれた。

「私は、結婚したら、夫の母親とは仲良くやるし、息子の嫁と同居しても、嫁のすることに口出しはしない。家は、平和がいいもん」

お姉ちゃんが、そう言ったあと、私は、知らないでいいことを知ってしまったな、と思った。そして、私も、お姉ちゃんが言うように、とにかく、平和がいいけど、離れて住んで会話を少なくしてるから平和っぽいという今の我が家の平和は、『本当の平和』じゃない、と思った。

「おばあちゃん、このトラの絵は？ 捨ててもいいの？」

額に入った絵だったので、聞いてみた。

「探しとったんよその絵。どこにあった？」

おばあちゃんは、うれしそうに言った。

「押入れの木の箱の中」

「よかった。なくしたかと思うとった。愛ちゃん、冷蔵庫にブドウがあるけえ、麦茶といっ

しよに持つてきてくれる？ 休憩にしよう」

おばあちゃんは、ブドウを食べながら、こんな話をしてくれた。

「おばあちゃんが八歳の頃、今の福岡県の県庁がある場所に福岡市の動物園があったんですよ。桜が咲いとったから、春休みやったと思う。大学生だった幸治兄さんが、

『光江、動物園に行こう』

と、誘ってくれた。

次の日、二人で路面電車に乗って動物園に行った。人がまばらな動物園のベンチに並んで座ってお芋を食べているとき、幸治兄さんが、こう言うたんよ。

『光江とは、しばらく会えんようになるけど、お父さんやお母さんの言われることをよく聞いて、しっかり勉強せんといかんよ』

『兄さん、どこに行くん？』

おばあちゃんが、そう尋ねたら、兄さんは、

『戦争たい。大学生も行くようになったと』

と、言った。

学徒出陣ゆうて、その年から、大学生も戦争に駆り出されるようになったんや。

急な話に涙が出てきて、その時、おばあちゃんは、なんも言えなかった。

それから、二人で、白熊やカバを見て、ライオンを見て、トラのところに来た。

その時、おばあちゃんは、悲しそうな眼をした美しいトラの姿に見とれてしもうて、動けなくなった。シベリアから連れてこられて、峰と名付けられたそのトラも、おばあちゃんをじっと見とった。

何日かして、大学で美術部だった幸治兄さんが、この油絵を描いてくれたんよ。

それから、幸治兄さんは、戦争に行った。

その年の梅雨のころやった。トラの峰は、ライオンやカバと一緒に銃で殺されたことが、新聞に載った。

空から爆弾を落とされて、町中が火の海になったとき、猛獣が逃げて、人間に危害を加えるとか、食糧不足で養えなくなったとか、理由はあったらしいけど、戦争さえなければ、死ななくてもよかったトラやライオンだよ。

次の年の、昭和二十年六月十九日の夜、アメリカの爆撃機が二百機以上もやってきて福岡市は、本当に、火の海になった。猛獣に殺されるどころか、一晩で九百二人が亡くなって、六万人以上が家を失った。

おばあちゃんは、リュックに入れたこの絵を背負って、火の海の街を必死で逃げたんよ」
おばあちゃんは、七十数年前の話を昨日のことに話してくれた。

「この絵の中の、トラが見ている女の子、おばあちゃんだよね」

トラの視線の先に、おかつは頭の女の子が立っていた。

「そうよ、八歳のおばあちゃん」

「この絵を描いた幸治兄さんはどうなった？ 戦争から帰ってきたの？」

私が聞くと、おばあちゃんは、悲しそうな顔をして、首を横に振った。

その時、私は、おばあちゃんのことを何も知らなかったことに気が付いた。断捨離を

手伝わなければ、おばあちゃんのお見合いのことも、『赤毛のアン』の本が好きだったこ

とも、幸治兄さんのことも、何もわからないままだった。

十年以上ほとんど毎日顔を合わせていて、何も知らないままの家族。話さないとわか

らない。聞かないとわからない。

私は、ブドウの最後の粒を口に入れながら、そう思った。

夏休みの最終日に、おばあちゃんの断捨離は、終わった。私は、いっぱいになった

「保存」の箱を見ながら、断捨離って、捨てられないものを見つけることなんだと思った。

秋も終わり頃の早朝、私たち博多湾の近くの小学校の六年生ニクラス四十八名は、修学旅行のバスに乗り込んだ。

もうすぐ長崎の平和公園に着くというとき、班のリーダーの直也が、小声で言った。

「長崎の平和像と奈良の大仏が何やらもめています。先に暴力をふるいそうになったのは、

どっちでしょう？」

「奈良の大仏」

直也の後ろの席の美香が答えた。

「正解です。なんで？」

「平和像は、平和だから」

直也の隣の席の涼が答えると、直也は、

「なぜなぜやんか。もうちょっと、何か、とんちの効いた答えが欲しいんだよな」

と、涼の頭を指でトントンとつついた。

「大仏は、仏像なんですね、ブツゾーと、相手をたたこうとした」

美香の隣の席で、私が答えた。

「さすが、愛。ダジャレ強！ 仏像は、ブツゾーだから。はい、その通り。平和像は、

銅像どうぞうなんで、ドウゾどうぞってね。争あらそわないんだ」

直也なおやは、そう言いって振ふり向むくとニツコリと笑わらった。

私わたしたちパンダグループの四人よにん、元々もともと仲なかがいいんだけど、リーダーのおかげでなんか楽たのしい旅行りょこうになっている気がした。

原爆資料館げんばくしりょうかんの見学けんがくが終わると、グループでのフィールドワークだ。班はんで話はなし合あったコースを四人よにんで回まわって、夕方五時ゆうがたごじには旅館りょかんに戻もどらなければならぬ。

平和公園へいわこうえんを通とおって、如己堂にょごどうを目指めざして歩あるいているとき、直也なおやが言いった。

「何なんで国くにと国くにが戦争せんそうするのかな？ みんな同じ地球人おなじちきゅうじんなのに……。何なんで殺ころしあうのかな」

「自分じぶんのことばかり、考かんがえてるからじゃないの？」

涼りようがそう言いうと、美香みかが泣なきそうこえな声こえで、

「よく原爆げんばくなんか造つくれるよね。落おとせるよね。人間にんげんって、恐おそろしい」

と、言いった。

今いまも世界せかいのどこかで戦争せんそうがあっている。核爆弾かくばくだんは、いろんな国くにが、ものすごい数かず持もって

いるらしい。どうしたらこの地球ちきゅうが、争あらそいのない、本当ほんとうに平和へいわな地球ちきゅうになるのかな。

そう思おもった私わたしは、並ならんで歩あるいている三人さんにんの前まえに躍おどり出でて、こいう言いっていた。

「どうしたら、本当の平和になるのか、みんなで考えようよ！ 一生懸命勉強して、考えよう！ このままじゃ駄目だもん！」
こんなこと言っている自分が不思議だった。直也も美香も涼も、ちょっと驚いたようだったけど、みんな私の顔を見つめて、

「うん！」

と、うなずいてくれた。みんな大好きだ。

永井隆記念館の見学を終えて、隣接する如己堂の前で待っているとお姉ちゃんが来た。前日の夜、電話で明日の三時ごろ如己堂に行く予定だから、大学の授業が終わってたら来て欲しいと、頼んでいたのだ。

三人にお姉ちゃんを紹介して、長崎のこと詳しいから、いろいろ聞いてみて、と付け加えたら、さっそく、涼が、

「如己堂の如己ってどんな意味ですか？」

と、尋ねた。

「如は、ごとし。己は、おのれ。己のごとく人を愛せよ、という聖書の言葉から付けられたらしいよ。自分自身を愛するように他の人を愛することができたら、ケンカも戦争もな



くならない？」

お姉ちゃん（ねえ）がそう言う（い）と、涼（りょう）は、

「確かに、そうですね」

と、言（い）った。私（わたし）は、『本（ほん）当（とう）の平（へい）和（わ）』につな（か）がる考（かん）えだと思（おも）った。直（なお）也（や）が、永（なが）井（いた）隆（たかし）記（き）念（ねん）館（かん）

でもらった資（し）料（りょう）を見（み）ながら、

「隣（りん）人（じん）愛（あい）ってことですか？」

と言（い）うと、お姉（ねえ）ちゃん（は）、

「そうだね。みんなよく見（み）て、学（まな）んでいるね」

と、褒（ほ）めてくれた。

如（に）己（こ）堂（どう）の前（まえ）で（お）姉（ねえ）ちゃん（と）私（わたし）だけ（の）写（しゃ）真（しん）を撮（と）った。昔（むかし）、ス（マ）ホ（ホ）があ（あ）つ（つ）たら、お（お）ば（ば）あ（あ）ち（ち）や（や）ん（と）幸（こう）治（じ）兄（にい）さん（の）ツ（ツ）ー（ー）シ（シ）ョ（ョ）ット（も）簡（かん）単（たん）に撮（と）れた（の）にな（な）あ、と（おも）思（おも）った。

次（つぎ）の（ひ）日（ひ）は、ハ（ウ）ス（テ）ン（ボ）ス（で）思（おも）い（き）り遊（あそ）んで、お（お）土（み）産（げ）にカ（ス）テ（ラ）とチ（エ）リ（ー）豆（まめ）を（か）買（か）った。でも、何（なに）よ（り）の（お）土（み）産（げ）は、『本（ほん）当（とう）の平（へい）和（わ）』につな（か）がる考（かん）え（が）得（え）られた（こ）と（だ）った。

数（すう）日（じつ）た（っ）て、お（お）姉（ねえ）ちゃん（に）手（て）紙（がみ）を（か）書（か）いた。

「お（お）姉（ねえ）ちゃん（は）、修（しゅう）学（がく）旅（りょ）行（こう）の（と）き（は）あ（あ）り（が）と（う）。あ（あ）の（あ）と班（はん）の（み）ん（な）が、お（お）姉（ねえ）ちゃん（の）解（かい）説（せつ）、

とても分かりやすかったって褒めてたよ。美香が、愛のお姉ちゃん美人だよ、と言ってました。

ちよっと、まじめな話だよ。

我が家の平和についての話。お母さんとおばあちゃんが、仲良くなって、山本家が、もつと温かい『本当の平和』な家族になるには、どうしたらいいと思う？ お姉ちゃんだったら、いいアイデア思いつくかな、と思って……。やっぱり、隣人愛だよ。急がないけど、考えといてね。愛より」

すぐに返事が来た。

「愛へ。愛は、すごいね。修学旅行で学んだことをまず家の中で実践しようだなんて。さすが。まず、家のリーダーであるお父さんが動かないと、この平和プロジェクトは成功しないと思う。次に、お母さんとおばあちゃんの共通点を見つけると隣人愛は早いかも。とにかくお父さんと二人でじっくり話し合って、できることからやってみてね。加奈より」

手紙と一緒に、如己堂の前で腕を組んで笑っている二人の写真が同封してあった。

お姉ちゃん、大好きだよ。

市立図書館で司書のアルバイトをしているお母さんの出勤の日、私はお父さんと福岡市

動物園にいた。

お父さんと二人、トラの檻の前で写真を撮った。そして、トラの峰の油絵の話をした。お父さんは、思った通り、何も知らなかった。

私は、修学旅行で考えた平和のこと、そして家族の『本当の平和』について考えていることをすべて話した。

「私は、大好きなお母さんとおばあちゃんが、もっと仲良くなっしてほしい。今のままじゃ楽しくない。お父さんは、今のままでいいの？ 家のリーダーがちゃんとしてなかったから、二人は、何か打ち解けてないんじゃないの？」

話していたら、涙が出てきた。

「愛の言っていること、よくわかるよ。ごめんね。こんな心配させて、すまなかったね」

そう言って、お父さんは、課長になって忙しかったんだと、言い訳をした。市役所の課長ってそんなに忙しいの？ 課長になる前から、家のもめごとから逃げてたんじゃないの！

と言おうとして、その言葉を飲み込んだ。お父さんと言い争うことになったら、何のための平和プロジェクトかわからなくなるもの。

それから、お父さんと、家族の『本当の平和』のために何ができるかを話し合った。

次の土曜日、私は、お母さんにアップルパイの作り方を教えてもらった。一緒に作りながら、お母さんの子どもの頃のことをたくさん聞きだした。

「お母さんが私ぐらいの頃、どんな本が好きだったの？」

『赤毛のアン』。小学校の図書室で、マッシュウ小父さんが亡くなる場面を読んでいた時、声を上げて泣いたのを今でも覚えてるわ」

お母さんがそう言ったとき、私は、大さじですくっていたグラニュー糖を思わずこぼしそうになった。

お母さんのアンの話はしばらく続いたが、おばあちゃんも『赤毛のアン』が大好きなんだとは、まだ言わないでおこうと思った。

お母さんのアップルパイをおばあちゃんに持って行って、「保存」箱の中から、『赤毛のアン』を借りてきた。

その夜、お母さんがお風呂に入っているとき、お姉ちゃんに電話した。お姉ちゃんは、「すごい！ もう共通点見つけたんやね。愛は、『赤毛のアン』は読んだことある？ その中にきっと鍵があると思うよ」

と、アドバイスしてくれた。

動物園での密談のあと、夜の飲み会にも休日のゴルフや釣りにも行かず、お父さんは、お父さんでいろいろやってくれた。

夕食は、おばあちゃんを呼んで四人で食べるようになった。

リビングの壁には、トラの峰と八歳のおばあちゃんの油絵が飾られた。

夕食後は、古いアルバムを見て、家族で共に過ごした時間を確かめ合ったり、お母さんが借りてきた白黒映画「二十四の瞳」を観て、それぞれに感想を述べあったり、誰かが企画したイベントをみんなで楽しんだ。

『赤毛のアン』をすべて読み終えた夜、私はお父さんに、考えついた計画を話した。

お父さんは、いい考えだねと言って、必要な資金も出してくれた。

お母さんが仕事で家にいない土曜日、直也と涼と美香に手伝ってもらって、花壇や玄関や裏庭に白水仙の球根を植えた。

手伝ってくれたお礼に私が作ったアップルパイをこちそうして、三人に我が家の平和プロジェクトの話をした。

「世界の平和は、まず家庭からだね」

と、直也が言うと、美香が、



「平和は、努力して作り上げるものなのよね」

と、神妙な顔で言った。

冬休み、帰省中のお姉ちゃんも入れて家族五人で映画を観に行った帰り、お母さんが楽しそうに話しながら、おばあちゃんの車椅子を押していたから、私はお父さんに近づいて、

「お父さん、努力は報われるものね」

と、小声で言った。

春、花壇や玄関の周りの白い水仙の花がポツポツと咲き始めた頃、夕食後のイベントは、私の『赤毛のアン』の朗読にもらった。

白い水仙が庭いっぱい咲き誇るようになって、お姉ちゃんが長崎から帰ってきた。

次の日、お姉ちゃんと二人で、庭の白い水仙をいっぱい花びんに挿した。それをリビングのトラの油絵の前に置くと、水仙の香りが部屋いっぱいに広がった。

その日、夕食が終わって、私は、『赤毛のアン』の第十章を読んだ。アンが、仲たがいでいたリンド夫人から、仲直りのしるしに白い水仙、ジューン・リリーをもらう場面だ。読み終わると、みんなが拍手してくれた。拍手しながら、お父さんは、指で涙を拭いていた。お姉ちゃんは、小さくVサインをして、

「愛、朗読上手だね」

と、褒めてくれた。

おばあちゃんとお母さん、二人ともこの本が大好きなんだよって、言いたくなるけど、それは言わない。二人で話しているうちに自然にわかった方が、もっと仲良くなれるもの。

私は、白水仙のさわやかな香りを胸いっぱい吸い込んだ。

ジャミとコンフィチュール

村上　ときみ

「ジャミ、とってよ」

朝あさご飯はんの時とき、大おおばあちゃんおばあちゃんが横よこに座すわっている僕ぼくに言いった。

大おおばあちゃんおばあちゃんは、昔むかしからジャミおぼのことをジャミおぼと言いうんだ。

ジャミと言いうのが難むずかしいのか、そんな風ふうに間違まちがえて覚おぼえちゃったからなのかは、わからないけれど。

「はい」

僕ぼくは、大おおばあちゃんおばあちゃんにイチゴジャミのビンわたを渡わたした。

「ありがとうね」

腰こしの曲まがった大おおばあちゃんおばあちゃんが、しわしわの手てでスプーンもを持もって、ジャミをすくおうと
していた。

うちには、お父さんとお母さん、それからおじいちゃんとおばあちゃんとお母さんの大ばあちゃんが住んでいる。

大家族というやつだ。

今は、お父さんとおじいちゃんとおばあちゃんは、畑に行って仕事をしている時間。最近、なすを収穫するので毎日忙しいんだ。

「ジャミじゃないよ。大ばあちゃん、コンフィチュール。コンフィチュール」
僕の前に座っている一歳上のお姉ちゃんが、一語一語区切りながらあきれ声で言う。

「はい、はい」

大ばあちゃんは、わかっているのか、わかっていないのかよくわからなかったけれど、ニコニコしながら返事をして、ジャムをパンにぬっていた。

（うちでは『ジャミ』で通じるんだから、そんなに言わなくてもいいじゃんか）
そう思ったけど、お姉ちゃんには言えないで、僕はパンを口いっぱいにはおぼった。

「かっこ悪いなあ」

お姉ちゃんはぶつぶつ言いながら、ジャムをぬったトーストに、サクリとかじりついていった。



（そうかなあ。何を言われてもジャミと言いつづける大ばあちゃんの方が、かつこいと思おうけどな。それに、だいたいうちのような農家に、コンフィチュールなんて言葉は似合わないよ・・・）

と思おしながら、お姉ちゃんを上目遣いで見てみると、

「どっちも、どっちね。どこかが、ちよつと違おうのよね」

こつ言つて、お母さんが、目玉焼きと焼きなすがのつたお皿を大ばあちゃんの前にこつりと置おいた。

「正確には、コンフィチュールは、もっとさらりとしていて、果物の形が残っているみたいな のよね」

お母さんはお姉ちゃんの方をちらつと見るけれど、お姉ちゃんは何も気にしないで、氣取りながらトーストを食べている。

最近繰り返される、ジャミVSコンフィチュールの戦いのせいで、お母さんもコンフィチュールについて調べたみたいだ。

お姉ちゃんは、近頃『コンフィチュール』という言葉にこだわっているんだ。
先月までは、僕と同じようにジャムつて言つてたくせに。

「同じクラスのおミちゃんが、家族でパリに行ったんだって。フランスではジャムのことを、コンフィチュールって言うんだってよ」

ある朝、お姉ちゃんがうっとりした声で言った。

「パリっていう感じで、ステキだよねえ」

ミちゃんというのは、かわいくて上品でクラスの人気者らしく、お姉ちゃんの話によく出てくるクラスメイトだ。

「だから、これからは私もコンフィチュールって言うことにします」

突然、お姉ちゃんは、訳のわからない宣言をした。

そして、この宣言以来、ジャミとコンフィチュールが、テーブルの上で飛び交うようになったんだ。

ある日の学校からの帰り道。

「じゃ、また後でな」

かっちゃんがそう言って、僕を追い越してかっこ良く走って行った。

「うん。後でね」

僕は大きくうなずくと、かっちゃんの後ろ姿を見送った。

(跳ねるようにして走る姿、いつ見てもかっこいいよな)

五年生になってから、学校から帰ると、僕は川沿いの広場で友達とサッカーをするようになった。

三月までは、それまでずっと同じクラスで、家も近かったヒロキとゲームをして遊ぶのが好きだったけれど、クラスも別れてしまい、なんとなく遊ぶことがなくなってしまった。そのかわりに、今のクラスのリーダー的存在のかっちゃんと、かっちゃんが好きなサッカーを一緒にやるようになったんだ。

僕は、人気者のかっちゃんと遊べるのが、すぐうれしかった。

「早く家に帰って、ランドセルを置いて、広場に行かなくちゃ」

そうつぶやくと、僕はタタツとリズムよく走り始め、すぐに道を左に曲がった。

すると、少し先の電柱の近くに、ヒロキらしい男子がいるのが見えた。

ヒロキは背が低くて、やせてて、マッシュルームカットにしているんで、すぐにわかる。

ブロック壁に寄りかかって、誰かと話をしているようだけど、電柱で相手がよく見えなかった。

(あんなところで、誰と話をしてるんだろう？ 友達かな？)

僕はそう思った。

ところが、電柱のそばまで来た時に、その考えが間違っていることに気付いた。ヒロキの前にいたのは、ブレザー姿で、僕らよりずっと体の大きな中学生だった。しかも二人。

なんで？ と思い、立ち止まってちらっと見ると、おびえて真っ青な顔をしているヒロキと目があった。

「あっ」

小さくヒロキがつぶやいた瞬間、ヒロキの目が少し輝いた。

そんな様子を見て、中学生達が同時に僕の方を振り向いた。

振り向いた中学生の顔は思った以上にゴつくて、目つきもするどくて怖い。

「う・・・」

二人ににらみつけられて、僕は言葉を失ってしまった。

「なんだよ。お前」

「こいつの友達か？」

低い声で話す中学生に、

「・・・」

僕は何も言えずに、後ずさりした。

その時、

「ねえ、ミュちゃん」

聞き覚えのある声が、聞こえてきた。

(お姉ちゃんだ)

僕はそう思って、お姉ちゃんの方をさっと見た。

友達と一緒に、三人一列に並んでこちらに歩いて来る。

けれど、

「うわあ、ケンカかな。やだね、怖いね」

真ん中にいるミュちゃんらしき女の子が、甘ったるい声でこう言っ
て肩をすくめると、

「早く行こ、行こ」

と、もう一人の女の子が、ミュちゃんをかばうようにしながら足を早めて行
ってしまった。

僕に気付いていたはずだけれど、ふいっと視線をそらして、お姉ちゃんも行
ってしまっ

た。

寄りそうようにして、遠ざかって行く三人組から、

「パリの街でもね、ケンカしている人がいたんだけどね・・・」

というミウちゃんの声が聞こえてくる。

（ちえっ。コンフィチュール一派め。冷たいな）

と僕が思った時、

「質問したんだから、早く答えろよ。お前は、こいつの友達なのか？ こいつ、オレにぶ

つかってきたんだぜ」

中学生の低い声が、また聞こえてきた。

「い・・・」

中学生達が、とてつもなく恐ろしいモンスターに見え、僕は、

「いいえ」

と言って、逃げ出すことを考えていた。

と、その時、ふと『ジャミ』という大ばあちゃんの声が頭の中にひびき渡った。

よくうちに遊びに来ていたヒロキは、大ばあちゃんがジャムのことをジャミと呼ぶのを

知^しって^おいた。

「大^おばあちゃんて、面^{おも}白^{しろ}いね。何^{なん}度^ど言^いっても、ジャミを直^{なお}そうとしないんでしょ。そういうとこ、好^すきだ^な。しかも、ジャミって、あのゲームのボスキャラの名^な前^{まえ}と同^{おな}じだよ。それを知^しってるのかなあ」

ヒロキが、ケラケラ笑^{わら}っている顔^{かお}を思^{おも}い出^だした。

ひとりこ^こり^りようしん^{しん}と^とも^もば^ばたら^ら
一人っ子で両^{りやう}親^{しん}が共^{とも}働^ばきのヒロキは、うちのような大^{だい}家^か族^{ぞく}にあこがれていたんだ。

(ダメだ。このま^まま^まじ^じや、僕^{ぼく}もコンフィチュール一^{いっ}派^ぱにな^なって^てし^しま^まう)

こ^こう^おも^も思^しった瞬^{しゆん}間^{かん}、僕^{ぼく}の口^{くち}が勝^か手^てに動^{うご}き出^だし、

「知^しって^ますか？ フランスではジャムのことを、コンフィチュール^て言^いうのを」

裏^{うらがえ}返^{かえ}った声^{こえ}が飛^とび出^だした。

「何^{なに}、わけわかんないこと言^いってんだよ」

中^{ちゆう}学^{がく}生^{せい}が、じり^{ぼく}っ^{ほう}と僕^{ぼく}の方^{ほう}に近^{ちか}づ^きいて来^きたけれど、

「お姉^{ねえ}ちゃん^は、や^やっ^ぱりフ^らン^すって^かっ^こい^いって^い言^いって^いる^けれ^ど、正^{せい}確^{かく}には、ジャムとコンフィチュールは違^{ちが}う物^{もの}だ^て、お母^{かあ}さん^が言^いって^ました。でも、お姉^{ねえ}ちゃん^はフ^らン^すって^かっ^こい^いって^い言^いって、す^すぐ^くあ^あこ^こが^がれ^れて^いま^ます」

僕は話し続けた。

そして、少し後ずさりをしながら、

「だけど、うちの犬はあちゃんなんか、ジャムのことを・・・」

とここまで言った時、

「何だよ。お前は、オレ達のことをバカにしてるのか」

中学生が、またぎろりと僕をにらみつけた。

壁にへばりついているヒロキが、心配そうな顔でこちらをじっと見ているのがわかった。
僕は顎を動かして、

（逃げろ）

と、ヒロキに合図をした。

けれど、ヒロキは首を横にブルブルとふっている。

（逃げろよ）

と、僕がまた顎をくい、くいと動かすと、

「いったい何が言いたんだよ」

こう言いながら、中学生二人が壁のように、僕の前に立ち上がった。

（サッカーできたえた足で、かけ出せば逃げられるかな。かつちゃんのように、跳ねるようにして、全力で走れば大丈夫かな）

そう思って、僕が走り出そうとした瞬間、中学生にがしっと半袖Ｔシャツから出ている腕をつかまれた。

（しまった、つかまっちゃった・・・）

僕は目をつぶって、頭を下に下げてうなだれた。

背中のランドセルがゆれて、中で教科書がガサツと音をたてている。

（もうダメだ。なぐられるのかな・・・。ヒロキも助けられなくて、僕ってダメだ

な・・・）

絶望的な気持ちで、僕が唇をかみしめていると、

「ジャミー！ 大ばあちゃんは、いつだってジャムのことをジャミって言うんだ！」

ヒロキが今まで聞いたことがないような大きな声を出した。

「はあ？」

僕の腕をつかんでいない方の中学生が、右手をグツとにぎりしめながら、ヒロキの方を振りかえる。

「ひゃっ」

ヒロキが、両手で頭をかかえた。

するとその時、

「お前ら、何してるんだ！」

お父さんの大きななり声が、聞こえてきた。

「やめろ！手を離すんだ」

ぱっと顔を上げると、土が付いた作業着を着たお父さんが、すごい勢いで走って来るのが見えた。

その後ろに、お姉ちゃんの走っている姿も見える。

（助かった。お姉ちゃんが、畑にいるお父さんと呼んできてくれたんだ）
僕がほっとして、ふうっと大きく深呼吸するのと同時に、

「やべっ」

と中学生達はつぶやき、僕の腕を投げ捨てるようにして手から離すと、さっと走って逃げに行ってしまった。

力のぬけた僕が、へたっと地面に座り込む。ヨロヨロしながら、ヒロキが僕の方にやっ



てきた。

そして、

「ありがとう。助けてくれて、ありがとう」
と、泣きそうな顔で何度も何度も言っていた。

次の日の朝のこと。

「ジャミとってよ」

大ばあちゃんが、いつも通りに言う。

僕がテーブルの真ん中にあるジャムのビンに手をのばそうとした時、お姉ちゃんが僕よりも早くつかんで、大ばあちゃんに渡した。

「ありがとうね」

大ばあちゃんが、ゆっくりと言う。

今朝は、お姉ちゃんの口から、コンフィチュールという言葉は出てこないみたいだ。

「大ばあちゃん、今度久しぶりにヒロキとうちで遊ぼうと思うんだ」

僕は胸をはって、大ばあちゃんに言った。

「それは、いいねえ。ヒロキ君にはずいぶんと会ってないよ。私も楽しみだよ」
大ばあちゃんが、目を細めて笑った。
今日のイチゴジャム、いつもよりなんだか甘い気がする。

総 評

子どもたちの夢を育み、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」は今年で第四十三回を重ねることができました。応募してくださいました皆様はじめ関係者の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

今回は、全国四十都道府県から、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童向け）に百五十四点、第二部（小学校中・高学年児童向け）に百十九点、総計二百七十三点もの応募がありました。創作童話の公募を始めて以来、過去最高の応募総数となりました。コロナ禍で、行動が制限され、多くの我慢を強いられている子どもたちに、今こそ、夢や希望、家族の絆、友情、思いやりなど心温まる作品を届けたいという気持ちがこのような結果になったのではと大変嬉しく思います。

さて、子どもたちは色々な環境の中で、言葉を獲得していきます。読み聞かせもその一つです。絵本を読んでもらっている子どもたちの言葉の発達は早く、表現も豊かと言われています。人が人と関わりながら生きていく上で、自分の考えや思いを言葉にして伝えることはとても大切です。子どもたちは絵本や物語を読んでもらいながら、頭の中に絵を描きます。そうすることで内容を理解し、楽しむことに繋がります。「聞かせたい」創作童話であることを考えますと、この言葉は子どもたちに理解できるだろうか、この表現は適切だろうか、場面設定に無理があるのではないだろうかと思われる作品も見られました。また、今回はコミカルな作品も多く、楽しいけれど、面白さを追求するあまり主題がぼやけてしまっていたり、創作童話の趣旨と少しずれていたりしている作品も見受けられました。

言葉の力は偉大です。だからこそ、時間をかけて吟味された言葉で、人として大切な多くのことを、これからも子どもたちに伝えていただきたいと心から願います。

以下、各都ごとに審査で話し合われた内容をお示しします。

〈第一部〉

- 第一部は、保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童を対象としているからか、今回はコミカルで楽しい作品がわりと多かった。「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という趣旨やテーマの一貫性という点から推敲することですらによい作品に仕上がる。
- 「なぜ」という疑問が残らないように、登場人物の内面をもう少し深く掘り下げたり、場面が変わる時、丁寧に説明したりするなどの工夫が欲しい。
- 子どもたちが「読んでほしい」「聞きたい」と思うのはまず作品名である。この期の子どもたちには難しいと思われるものの中にはあったが、全体的に、イメージが広がるような楽しい作品名が多かった。
- 対象を常に意識し、言葉の遣い方や表現の仕方、視点を変えるとさらに素晴らしい作品になると思われるものがあった。

〈第二部〉

- 第二部は、小学校中・高学年児童を対象としている。この期にふさわしい生き方、家族の絆、いじめ問題などをテーマにした作品が多く、中には大人にもぜひ読んで考えて欲しいと思わせるものもあった。
- 起承転結がはっきりしたものや登場人物の人物像や関係性、情景が丁寧に生き生きと描かれた作品はイメージしやすく、最後まで一気に読み進めることができる。一方、山場がなく平坦な構成になっていたり、登場人物の心情や行動が描ききれていなかったりする作品もみられた。
- 作品の鍵を握る登場人物や物などが大事な場面でさりげなく、且つ意図的に配され、読み終えた後に改めて納得のいく作品が多かった。

入賞作品の選評

《第一部》

特選 「大ちゃんのあいいうえお かきくけこ」

- 小学一年生の大ちゃんが、宿題を終わらせて、ゲームを始めようとすると、どこから声がします。その声は何んとノートに書いたひらがなの声だったのです。そこから物語が始まります。
- 近頃の童話の中には、文字が画面から飛び出して動き始めるという話がよくありますが、ユニークなのは、大ちゃんがひらがなの文字をまちがえて書いたために、ひらがなたちが、ダンスをうまく踊れなかったという発想がおもしろいと思います。
- 子どもたちの宿題のノートが、夜、先生の机の上に置かれていると、となりにあった音楽の教科書が、歌を歌ってきかせます。すると、ひらがなたちがおどりを始めるというのも楽しいお話です。
- そういう場面をこっそり見てみたいという気さえます。
- ところが、大ちゃんのノートの「お」や「き」はぎくしゃく、フラフラしてうまく踊れなかったということです。よく見ると「お」の点は左側に打ってあるし、「き」は反対向きに書くまちがいをしていたのです。
- ひらがなたちに言われて、やっと大ちゃんは自分のまちがいに気づき、きちんと直して、宿題を終わらせたのでした。
- ということでは低学年にありがちな、うっかりミスを直せた大ちゃんです。
- 文字を習い始めた一年生に、自分も気をつけたいと思えるような楽しいお話です。平明な文章で、低学年でもよく読める文になっていると思います。
- ただ、文末の「ます」の使い方が、あいまいな所が多々見られます。よほど、その場の臨場感を強めるための使用は歓迎ですが、話を運ぶための表現は「ました」の方が読む者に安定感を与えていると思います。一考を。

入選 「さくらちゃんのほくろ」

○ コンプレックスを抱いている部分を好きになってくれる、そんな友達が存在がいかに大切であるかを教えてくれる作品である。かおや体にほくろのある主人公のさくらちゃん。小学校入学以来、ほくろをいじめっこにからかわれるようになったせいで、コンプレックスをもつようになり、学校にも行きたくなくなっていたさくらちゃん。そんなさくらちゃんが、九官鳥のマイナと出会い、ほくろを大好きになってくれたマイナとの触れ合う中で、ほくろに対する受け止め方に変化が現れ、いじわるにも屈することなく、強く、前向きに成長する姿に、読み手の心にも勇気が湧いてくる作品である。

○ お母さんからさくらちゃんに受け継がれようとしている「大切だからほくろがついて生まれてきた」という考えには、違和感を感じる。「大切」かどうかではなく、好むと好まざるとにかかわらず、「『ほくろを含めてさくらちゃん』『ほくろもさくらちゃんの個性』だから自信をもって」と、私なら伝えたいと思った。

入選 「にげだしたおかね」

○ おかねをたべると、ブタさんも、にこにこしているようにみえました。「まるで、なかのおかねたちが、だいじょうぶだよ、ぼくたち、どこにもいかないよ、といっているみたいでした。」など、比喻を使って、ブタやおかねが気持ちをもっているかのように表現することが、お金が動き出すことの伏線となっており、「この後、何かが起こるな」と、読み手をワクワクさせる作品である。

○ 「おかね」を「おあし」ということ、「がまぐち」（小銭入れ）の役割でカエルを登場させることなど、子どもたちにとって耳なじみがない日本語を巧妙に使用し、話を展開させているのが大変面白い。

○ 夢での出来事だったという話の着地点は納得できたが、ファンタジーへの入り口が明確であると、さらに面白い作品になると思う。

入選 「あひるのアッヒルダー」

○ 今年はナンセンスというか、こっけいな内容の話もいくつかあって、そういう作品をどう評価するかということでも悩みました。

○ ある町に「アッヒルダー」と鳴くアヒルが現われて、そのアヒルが、鳴くと、ぼうし工場の工員さんたちは、もう昼になったと思って、お弁当を食べてしまいます。おこった工場長は、アヒルをつまみ出してしまいます。パン屋さんの前で鳴くと、「大変だあ、給食のパンを早く届けなければ」と早々に学校へ持っていったり、新聞屋さんの前で鳴き、新聞屋さんをあわてさせたりとアッヒルダーは、みんなからきられていきます。

○ アヒルは「ぼくは、ただ鳴いているだけなのに」と悩んで、町を歩いていると、あるお母さんに呼び止められて、朝ねぼうの子どもをその声で起こして欲しいとたのまれます。

百個ならべて鳴る目覚まし時計を、次々と止めて、またねてしまう子どもだったのに、「アッヒルダー」の声ですっかり目を覚まし、学校へも遅こくせずにすみました。

母親に感謝され、アヒルは自分が役に立ったことが嬉しくなりました。アヒルは、この家で七時に鳴くこと、町では、本当のお昼だけに鳴くことをゆるされて、みんなに頼りにされるようになったというゆかいな話です。

○ 子どもたちは、前半のアッヒルダーの声を聞いてお昼を食べてしまう場面とか、子どもが目覚ましを百個もならべても起きないというような場面はおもしろく思うだろうし、大人なら百個も目覚ましを止めている間に目が覚めてしまうんじゃないと考えてしまいがちですが、子どもは、このように大げさなところもおもしろく読めると思います。

○ じゃまにされ続けていたアヒルが、みんなに評価され頼りにされるようになったという結末は、子どもたちにとっては、よかった、ホッとするという読後感にひたれるのではと思います。

《 第二部 》

特選「ぼくらのニワトリ奮闘記」

- 入院中の祖父に代わって世話をしていた鶏がキツネに襲われ、それを必死に守った兄弟の奮闘ぶりが生き生きと描かれていて、子どもたちには、登場人物たちのもつ素朴な魅力を読み味わってほしい作品である。
- 本作品は、主人公が鶏の世話をする早朝の場面から始まる。主人公が鶏の世話をすることになった経緯、祖父が作った鶏の小屋と運動場のこと、祖父自慢の鶏「金四郎」のこと、また、部活へ出かける兄との会話の様子等が丁寧に描かれており、これらの描写を通して、物語の背景とともに登場人物の人物像も浮かび上がってくる。
- 鶏がキツネに襲われる場面は、文に勢いがあり、緊迫感が伝わってくる。慌てふためきながら必死に鶏を守ろうとする主人公と、普段は鶏の世話をしない兄が、年上らしく頼もしさを発揮する様子とが対照的であり、その中でお互いを思いやり、学び合っている兄弟の姿に、読み手は称賛の言葉を贈りたくなる。
- 前向きに成長する兄弟を支えている存在として、祖父や獣医がいる。兄弟を、温かく、おおらかに見守る大人の存在があることで、勇気や思いやりの心が育っていることにも納得がいく。
- 一番鶏である金四郎は、物語の起承転結の展開を形作る役割を果たしており、また、金四郎とのかかわりを通して主人公や祖父の人物像も描かれるという重要な存在である。それだけに、少し惜しいと思うのは、金四郎と祖父との関係性をライバルとしていることが、適切であるかという点である。ライバルであれば、飼う側と飼われる側以上の何かを競い合う関係性にあることを、きちんと描くべきであったと思う。

入選「白い鳥」

○ いじめられた人といじめた人の関係を取り持つ白い鳥という発想が面白い。また、人間のいじめに胸をいため、どんなに天候が悪くても、いじめをこの世からなくすために懸命に手紙を届ける白い鳥の姿に、読者は共感しながら読み進めることができる。そして、日常からいじめをなくそうとする気持ちを高めていくことだろう。

○ 自分の過去のいじめを許してもらおうと上原君に手紙を書く兄。しかし、上原君からの返事は来なかった。ほんの些細なことからいじめは始まり、徐々にエスカレートしていき、取り返しのつかない事態を招くことになる。いじめ問題について、正面から学び考えることができ、いじめは絶対に許されない行為であることを伝えてくれる、子どもだけでなく大人にも読んでほしい作品である。

○ サッカーが苦手なことはいじめられていた上原君が、苦しみを乗り越え努力を続け、前向きに生きている姿は、悩みを持ち苦しんでいる読者に、勇気と希望を与えてくれる。

○ 「どうするのだよ」「分かるのだよ」「上手なのだって」など、心内語や文末表現に不自然さを感じる部分が見受けられた。

入選「庭いっぱいの白い水仙」

○ 母親と祖母の不和を解決し、家族の平和を実現しようとする懸命に考え、行動する主人公の取り組み方や見方・考え方が、とても立派で、高学年の子どもたちに読んでもらいたい作品である。主人公が、祖母の断捨離に付き合いながら聞く思い出話や、修学旅行で平和について考えるエピソードは、「戦争のもたらす悲劇を繰り返さないための平和への努力」という大テーマと、家族の平和を実現したいという身近な問題とを、主人公が結び付けて考え行動するという展開を自然な流れにしている。

○ 作品の前半で語られる祖母の思い出の品「赤毛のアン」と「トラの絵」は、作品の後半では、主人公なりに意味を込め

て再登場する。ただの思い出の品物として終わらせるのではなく、主人公の成長や物語のテーマと合わせて意味をもつ具
体物となっている点も味がある。

○ 物語の最後は、家族の問題が劇的に好転しているわけではないが、主人公の密かな努力が確実に実を結びつつあること
を感じさせる。

強い思いをもちつつも、穏やかにしなやかに思慮深く物事を進める主人公の大人びた振る舞いが、作品の雰囲気をつくっ
ている。

○ 家族の平和のために問題を解決しようと行動する主人公の物事の捉え方や前向きな姿勢は、少々立派過ぎるようにも感
じられる。しかし、彼女の言動は、家族の問題を解決したいという強い家族愛が原動力になっていることや前向きで気の
合う友人たちがいること、そして、何よりも大学生の姉の存在によって、その人物像は納得いくものになっているように
思う。

入選「ジャミとコンフィチュール」

○ 四年生まで仲の良かったヒロキが中学生に脅されている場面に遭遇し、どうすればいいか悩む主人公。葛藤しながらも、
ヒロキが主人公の家族に憧れ、「大ばあちゃんのこと好きだな。」と言っていたことを思い出し、助けようとする姿に共感
することができる。また、中学生からヒロキを逃がそうとするが、恐ろしさで頭が真っ白になり、ジャミとコンフィチュ
ールの話を始める姿から、主人公の必死さが伝わってくる。

○ 五年生になり、クラスのリーダー的存在のかっちゃん、サッカーをして遊ぶ楽しさを感じ、ヒロキとは疎遠になっ
ていた主人公。しかし、「ジャミ！大ばあちゃん、いつだってジャムのことをジャミって言うんだ。」と大きな声を出した
ヒロキの姿を見て、これまで仲良くしていたヒロキの大切さに改めて気付かされる。主人公の心の変化から、友達につい
て考えさせられる作品である。

○ 昔からジャムのことを「ジャミ」という大ばあちゃんと、フランスに行ったクラスの人気者の影響でジャムのことを「コンフィチュール」と言うようになった姉の対比が面白く、この二人の対立がどうなるのか期待しながら読み進めることができる作品である。しかし、姉の心境の変化がなぜ生じたのが分かりにくい印象が残った。

○ 中学生に脅されているときの主人公の様子が詳しく描かれており、臨場感あふれる作品になっている。

「第43回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

- 1 応募資格 高校生以上(16歳以上)の方でアマチュアに限る
- 2 作品の種類 創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」
- 3 応募規定
 - ☆ 第1部 保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙(縦書き) 10枚～15枚
 - ☆ 第2部 小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙(縦書き) 15枚～20枚
 - ☆ 表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。
 - ☆ 原稿はA4判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。(ワープロ原稿も可)
 - ☆ 作品は自作未発表でほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限りします。
(公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。)
 - ☆ 応募は、各部につき一人一作品に限りします。文体は自由です。
 - ☆ 表紙に、第1部・第2部の別、作品の題名、住所(郵便番号も記入)、氏名(ペンネームの場合は本名も書き添えること)、性別、年齢、職業(学校名)、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。
 - ☆ 人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。
 - ☆ 民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。
 - ☆ 応募作品は返却いたしません。
 - ☆ 応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有する他、ホームページ上で作品集を公開します。
 - ☆ 作品選考に関するお問い合わせには一切応じられません。
- 4 応募の締切 令和3年9月13日(月) 消印有効
- 5 選考委員 (50音順・敬称略)
 - 有村真由美 (鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校長)
 - 上野 恵美 (鹿児島童話会理事)
 - 内村 英人 (鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校長)
 - 勝本 祥治 (鹿児島市学校図書館協議会会長 鹿児島市立生見小学校長)
 - 田之上由美 (鹿児島市立図書館図書係主幹)
- 6 入選者発表 令和3年11月下旬
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。
- 7 表彰式 令和4年2月27日(日)
- 8 賞
 - ☆ 特選(各部1編)…賞状及び楯、賞金5万円
 - ☆ 入選(各部3編)…賞状及び楯、賞金3万円
 - ☆ 佳作(各部数編)…賞状
- 9 主催 鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■応募総数

第1部	154点
第2部	119点
総数	273点

■年齢別応募状況

部門別	第1部	第2部	合計
16～19歳	0	1	1
20～29歳	8	13	21
30～39歳	15	9	24
40～49歳	29	18	47
50～59歳	29	19	48
60～69歳	47	35	82
70～79歳	17	19	36
80～89歳	6	4	10
90歳～	2	0	2
不明	1	1	2
合計	154	119	273

■都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
東京都	34	広島県	7	静岡県	3	栃木県	1
神奈川県	28	群馬県	6	奈良県	3	石川県	1
鹿児島県	27	京都府	6	宮城県	2	和歌山県	1
千葉県	19	三重県	5	秋田県	2	鳥取県	1
大阪府	18	山口県	5	山梨県	2	島根県	1
愛知県	17	青森県	4	滋賀県	2	岡山県	1
兵庫県	14	長野県	4	徳島県	2	大分県	1
北海道	9	長崎県	4	香川県	2		
埼玉県	9	熊本県	4	宮崎県	2		
福岡県	9	岩手県	3	沖縄県	2		
岐阜県	8	新潟県	3	福島県	1		

選考委員

(五十音順)

有村 真由美氏 (鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校校長)
上野 恵美氏 (鹿児島童話会理事 かごしま児童文学あしべ同人)
内村 英人氏 (鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校校長)
勝本 祥治氏 (鹿児島市学校図書館協議会会長 鹿児島市立生見小学校)
田之上 由美氏 (鹿児島市立図書館図書係主幹)

表紙絵・やし絵

(五十音順)

榎本 容好氏 (鹿児島市芸術文化協会会員)
中間 有紀氏
黒木 奈央氏

「子どもたちに聞かせたい創作童話」

第 43 集

発 行	令 和 4 年 2 月
編集者	鹿 児 島 市 鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 公益財団法人かごしま教育文化振興財団 鹿 児 島 市 城 山 町 5 番 1 号 TEL (099) 226-7771
印刷所	(株) あ す な ろ 印 刷 鹿 児 島 市 城 西 2-2-36-205 TEL (099) 214-3757

